ダンジョンで鬼殺の英雄を目指すのは間違っているだろうか

ミキサ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは〝オラリオ一慈(やさ)しい英雄譚〟

モンスターだけでなく鬼が蔓延る異世界、迷宮都市オラリオ。

そんな迷宮都市に英雄、冒険者、そして――鬼狩りに憧れる一人の少年がやってくることからこの物語は始まる。

初雪のように白い生地にススキの影が模様された羽織を身に纏い、短刀を携えた少年。

白髪赤目のベル・クラネルの夢は一つ。

〝鬼狩りの冒険者として英雄になること〟

あとかわいい女の子と出会えたら嬉しいです。などと純粋なのか邪なのか。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

・この作品はダンまち×キメツのクロスオーバーの作品となっております。

・主人公はベル君です

・炭治郎達は前作主人公ポジです。

・この世界には鬼がおり、そのため原作の展開と重なる点、変わる点がございます。

目次

序幕　”鬼狩りの冒険者〃　1
一幕〃　白兎、オラリオに立つ〃　15
二幕〃　異常と覚悟〃　24
三幕〃　入団試験〃　34
四幕〃　鬼と姫〃　42
五幕〃　月は輝き、兎は焦がれる〃　53
六幕〃　入団と恩恵〃　64
七幕〃　豊穣の女主人〃　74
八幕〃　弱者の拳〃　84
九幕〃　炎柱〃　99

序幕　〝鬼狩りの冒険者〟

あの生き物は一体何なのかわからなかった。

焦る心と体とは裏腹に頭はいたって冷静に目の前の出来事をゆっくりと捉えていた。

荒い息遣いの口から溢れ出る涎はゴブリンの血と混ざりあい醜悪な臭いをまき散らしている。

その瞳孔は赤く血走っており、盾に割けたような奇怪な形をしていた。

また、力の込められているだろう手先から伸びる紫色の爪は鋭く伸びており、今しがた抉った少年の祖父の血を飛び散らせた。

「ああああああああああああああああああああ!!!!」

腹から血を溢れ出し、視界の端で倒れていく祖父の姿に、少年――

ベル・クラネルはただ悲痛な叫びをあげることしかできなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ベル、山に行くのか?」

日は高く上り、昼食は隣の村のおばさんがくれた野菜を塩漬けにしたものと、お握りを腹いっぱいに食べ満足そうな顔をした白髪赤目の可愛らしい少年、ベルは靴を履きながら返事をする。

「うん、お腹いっぱいになったから少し動きたくて!」

返事際に振り向けば、麦わら帽子をかぶった祖父は片手に鉈を持っていたのでおそらくこの後稲の収穫に行くのだろう。ベルも大きくなったら祖父のように農作業に勤しむのだろうか。ふと、ベルはそんなことも考えたがすぐさま顔を横に振る。確かにベルには祖父の力になりたいという気持ちもあるがそれ以上に、冒険者という職業に憧れがあるのだ。強力な力や派手な魔法で魔物たちを一掃する英雄のような存在だ。今は小柄なベルだが大きくなればオラリオという冒険者たるダンジョンが存在する街に行こうと考えている。

そのためにも少しでも体力をつけるために山に散歩をしに行くのだ。
「そうか、くれぐれも気を付けるんじゃぞ。ちゃんと日暮れまでには帰ってくる、じゃないと」
「じゃないと、鬼が出る。でしょ！　もう何回も聞いたよそれ！」
「いってきます」と言い残してベルは家の外に飛び出した。家から山までそう遠くなく、３０分ほどあれば到着するだろう。はじめは全力で走っていたが途中から体力が足りなくなったベルは足から力を抜き、のんびりと歩き始める。
「それにしても鬼かぁ。モンスターって言うならまだしも……」
ベルは別れ際、祖父に何度も繰り返し言われ続けた言葉を思い出した。
祖父が言うには、鬼と呼ばれる生き物が夜に現れて人やモンスターを食べてしまうという。
ゴブリンやトロールとは違うのかと聞いてみれば違うと言われた。太陽の光を忌み嫌うため夜にしか行動ができない。それ以上のことを聞いてみても祖父は悲しそうな表情をした後、何も言わなかった。
その表情の理由がベルは気になったが、やはりどんな英雄譚や物語を読んでみても近しい存在はいても、祖父の言うような鬼という存在は見受けられなかった。やはりベルが夜遅くまで遊ばないための作り話だとベルは受け止めていた。
だからこれは一時の気の迷いだったのだ。いつまでも子供扱いをする祖父に対する反抗心。
それにしたってかわいいもので、いつもよりも帰る時間を少しだけ遅らせ、太陽が山の陰に隠れ始め程には帰ろうとしていたのだ。
「はぁはぁ……ッ！」
傾斜のある山道を死にもの狂いで、まるで狐に追いかけられる兎がごとく形相でベルは走っていた。後ろからベルを追いかける複数の軽い足跡にベルは痛くなる肺を抑えながら声をこぼす。
「嘘つき！」
やはり鬼なんていなかった。

なぜなら陰りがあるとはいえ太陽の日はまだしっかりとベルたちのことを照らしてくれているのだ。それなのにベルは何かに追われている。いや、それは間違いなくモンスターだった。ゴブリンと呼ばれる今のベルよりも少し背の低いくらいの緑色の肌を持つモンスターだ。それらが棍棒を片手にベルを殺そうと、喰らおうと追いかけてきている。祖父に聞く話だけの鬼なんかよりもよっぽど怖かった。

だから自分が悪いとわかっていながら悪態をついてしまった。

「日の光が弱点なんていう鬼なんかじゃなくて、モンスターが出る！　そう言い聞かせてくれていれば！」

そう言い聞かせてくれていれば、太陽の光がまだあるから大丈夫だなんて気持ちでいつもより帰りを遅くしたりなんかしなかったのに。

そんなのは理不尽な言いがかりでしかない。モンスターは鬼とは違い日の光を浴びても生きていられる。ならばこのわずかに遅らせた帰宅時間で遭遇するかどうかが変わる生物ではない。もっと日が高い時に遭遇していた可能性だってあるのだ。

だからこそ、ベルが今この時ゴブリンに襲われているのは運がなかったとしか言えない。

けれど幼いベルにはそんな当たり前のことが素直に納得できるほど大人ではなかった。

紅色（ルベライト）の瞳から大粒の涙をこぼし、ベルの視界一杯が蜃気楼のように揺らぐ。そしてその揺らぎは山道を走るベルにとって致命的な一瞬だった。

「あっ……」

小さな声が漏れ出た瞬間、足のつま先に軽い衝撃と体全体に不気味な浮遊感を感じた。さらに次の瞬間体全体に響く衝撃の痛みにベルの肺から空気が吐き出される。背中を打ったのか、ベルの見上げる先には赤暗く透き通った空があった。

痛い。

受け身すら取れないベルの背中は打ち身に苛まれ、恐怖と痛みからベルの瞳から涙が止まらない。

ゴブリンの足音はすぐそこまで来ている。

早く逃げなければ。そうわかっているのに、体はいうことを聞いてくれなかった。
「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」
奇怪な声を上げるゴブリンの姿が三匹、視界の端に見える。走ることはやめたようだ。当然だ、獲物がすでに逃げることを諦めているのだから。今からベルはあのゴブリンたちが持つ棍棒で嬲り殺されるのだろう。そう思うと恐怖に奥歯が震えた。
ゴブリンたちから見ればとても滑稽な姿だろう。そこにいるのは英雄に憧れ目を輝かせていた少年ではなく、ただ絶望と恐怖に震える哀れな餌なのだ。成人男性であれば勝てるゴブリンにこの様だ。戦うことおろか逃げることすらできなかった。
いつの間にか日は暮れきっており、月明かりがゴブリンの影をより一層濃くベルに重ねていた。ゴブリンがすぐ側までやって来たのだ。三対の瞳が厭らしくベルのことを見下ろしていた。振り上げられる棍棒にベルは痛みに耐えるように目を強く瞑る。
だが、予想していた痛みはいつになっても来なかった。
「ギャッ!?」
「ア゛ア゛ッ!!」
ゴブリンたちの悲鳴と複数の転がるような音が聞こえる。それにいつの間にか新たな重い足音が加わっていた。
誰かに助けられたのだ。
そのことを理解するまでにベルは数瞬を要した。
自分が助かったとわかれば現金なもので、ベルはすぐに上半身を起き上がらせ目を開け、自身の恩人に頭を下げた。
よかった、自分は助かったのだと。安心に息を吐き出す。

「ありがとうございます！　助かりま……」

けれど少年は知らなかった。
世界というのはそんなにも都合がよくできておらず、優しくもないということを。

「たっくよぉ。ようやくあの迷宮から外に出られたんだ。てめぇらモンスターに久しぶりの餌を譲る訳ねぇだろぉ！　こんなクソみてぇな魔石しかねぇくせによぉ！」

グチャグチャ、ガリッ。

何かを咀嚼する音が夜の山に響き渡る。ベルは一瞬、その声がどこから聞こえてきているのかわからなかった。何故ならそこにいたのは人だからだ。倒れたゴブリンの側に座り込み何やらしている男の後ろ姿は確かに人だったのだ。短い黒髪に中肉中背の成人男性にしか見えなかった。

ガリ、ガリッ。

それはまるで飴玉を口の中で噛み砕くような音が三度響いた。そこでようやく男が首だけ振り返りベルと視線を合わせる。

「ひっ」

思わずベルの口から小さな悲鳴が上がり理解した。

鬼だ。今自分の目の前には鬼がいるのだと。

口元には涎とゴブリンの血とが混ざりあって醜悪な臭いを漂わせ、縦に割けた血走った瞳孔はまっすぐベルを見つめていた。そして、その鬼の向こうには腹を喰い破られ、魔石を喰われたゴブリンが灰となって消えていく姿があった。

鬼は人もモンスターも喰らう。

祖父のその言葉が頭に響き渡る。

目の前の鬼は何と言った。久しぶりの餌を譲るわけない。鬼は人とモンスターを喰らう。人を喰らう。人。

今ここにいる人とは誰だ。

そう頭が追いついた時、鬼は口を弧に歪め笑った。

「ベル！」

次の瞬間ベルは首元を誰かに後ろから引っ張られた。遠のく視界で、先ほどまでベルがいた場所に紫の爪が付きたてられていた。もし後ろから引っ張られていなかったら今頃ベルはあの鋭利な爪に刺し

殺されていただろう。
「ベル大丈夫か！」
もう一度かけられた言葉にベルは振り返る。
「お祖父ちゃん……」
そこには自分を抱きしめるようにして片手で鉈を構える最愛の祖父がいた。
言いたいことはたくさんあった。自分が言いつけを守らず遅くなってしまったことへの謝罪。目の前にいるのは本当に鬼なのか。けれど恐怖と安堵で言葉が出てこなかった。
「あぁん？　ちっ、なんだよじじいかよ。死に体の人間の肉なんて美味くもなんともねぇんだよなぁ」
ベルを一刺しにできなかった苛立ちからだろうか、不機嫌そうな男の声が聞こえる。ベルを抱きしめる祖父の腕に力が籠る。
「貴様、なんで鬼がオラリオから離れたこんな山の中にいる？」
「決まってんだろ！　ようやく、よぉうやく！　あの忌まわしい迷宮から抜け出すことに成功したんだよ！　ひゃぁはっはは！」
「そうか……オラリオから来たのか。ならこんなところで油を売ってる暇はないぞ。今に逃げ出した貴様の頸に刃を振るうため鬼狩り様が追ってくるぞ」
「だからお前らを見逃せって？　馬鹿言うんじゃねぇ！　二晩かけてここまで走ってきたんだぞ！　いくら鬼狩りだと言ってもそう追いつくもんじゃねぇ！　それにより、追手が来るって言うんなら尚のこと、人の血肉を喰って力をつけねぇとなぁ！」
鬼はにたりと笑って、ベルのことを指差す。
「けどお前みてぇなじじいの肉はまずそうだな。だからそこの白髪のガキを置いていくならてめぇは見逃してやってもいいぜ？　どうせ戦っても二人とも食い殺されるんだ。なら老い先短い人生でも、自分だけは助かりたいよなぁ？」
下卑た笑いを浮かべる鬼に対して、祖父の鉈を握る腕に一層力が込められたのを感じた。
祖父はベルの頭を力強く一撫ですると、ニカッっと笑った。

「安心しろベル。お前はわしの大切な孫じゃ。あんな鬼などに喰わせてやるものか！」
「交渉決裂だな！」
「ベル！　急いで村に走れ！」
「え」
「早く行けぇ!!」
祖父の叫び声と背中を押す手はベルの冷え切った体を解し村に向かって無理やり走らせた。祖父はベルとは反対に鬼に向かって鉈を構えて走り出す。
しかし
五秒後、横目で振り返ったベルの視界の端には腹から血を流しながら倒れていく祖父の姿が映った。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

「たっく、鬼狩りのこと知ってるからその仲間かと思ったが全然ちげぇじゃねぇか」
唐突な首を絞めあげる痛みと共に再び投げ出される浮遊感を感じた。今度は体全体を転がす衝撃に声を上げながら倒れる祖父の横まで投げ戻されていた。
「ベル……」
「お祖父ちゃん！　お祖父ちゃん!!」
「にげ……」
逃げろと伝える祖父の表情も絶望に染まっており、自分がこの様ではベルが逃げ切ることは不可能だと理解している目だ。
「こんな鉈で鬼である俺に勝てる訳ねぇだろ」
怯えた表情で鬼を睨みつけるベルの眼には鬼の心臓に突き立っている祖父の鉈があった。心臓に致命傷を負っても死なない鬼という存在に鳥肌が立つ。
鬼は何でもないように心臓から鉈を引き抜くと、それをベルたちの

前に投げ落とす。それは相手に武器を与える行為であるはずなのに、先ほどの様子から鉈という刃物が武器になり得ないことがわかってしまう。

「あっ……あ」

「赤子ほどじゃねぇだろうが、白髪赤目の珍しいガキだ。さぞかし美味いんだろうなぁ」

相変わらず口元から涎を垂らしながら下卑た笑みを浮かべる鬼は動けないベルへと手を伸ばした。

「待て……」

「あん？」

ベルの眼前に伸ばされた腕はそこで止まり、鬼は足元に転がる祖父に視線を落とした。つられるようにベルも視線を落とすと、そこには鬼の脚を必死に掴み鬼の形相で鬼を睨む祖父の姿があった。

「ベルを喰らうなら、まずはわしを殺してからに……しろ！」

「そうかよ」

鬼はつまらなそうに祖父に視線を固定したまま、ベルに向けられていた手を引き戻し爪を鋭く手刀の形を作った。先ほどベルへと向けたように祖父の体を貫く気なのだろう。

そんな絶望の状況で、ベルにできたことは。

「やだ！　やだ！　お祖父ちゃんを殺さないで!!」

ただ鬼の服の裾を掴み泣き叫ぶことだけだった。

当然そんなことで鬼は腕を止めようとはしない。もう片方の手でベルは殴り飛ばされ地面に蹲る。

痛みに恐怖に悲しみ怒り。様々な感情がこみ上げ訳が分からなくなるベルの視界の先で祖父に向かって鬼の爪が振り下ろされる。

目を閉じることはできなかった。そんな暇がなかったともいうし、目を閉じる動きすらできなかった。

ただわかることは。

「水の呼吸　肆ノ型」

視界一杯に水飛沫が振るわれたことだけだった。

「打ち潮」

◆◇◆

ベルが正気を取り戻したのは、鬼の頸が斬り落とされその肉体が灰となって消えた後だった。

死ぬ間際の鬼が何やら「鬼狩りがぁ！」「柱が来るなんて聞いてねぇぞ!!」と喚いていたがベルには理解できなかったし耳にも入らなかった。

ただそこには一刀のもとに鬼を倒した誰かがいるという事実だ。

鋭い深い水色の輝きに〝悪鬼滅殺〟が見える。

それまで雲に隠れていた月明かりがようやくその姿を露わにする。

まず目に付いたのは左右に模様の違う羽織。右半分は無地の臙脂色、左半分は亀甲柄の奇怪な羽織だ。それだけでも目立つのに、その青年はまるで凪いだ湖のような静かさを持っていた。背中まで無造作に伸ばされた黒髪は紐で括られており、なびく前髪の下に存在する切れ長の瞳は深い海のような青だった。美丈夫とはこのような青年のことを言うのだろう。

それなのに彼の振るった刃はまるで岩を削る激流のように鬼の頸を切り落とした。とても静かな激流。矛盾したような水の形。夜の冷気がベルの肌を冷やすのに反しベルの体はとても熱かった。

目の前の青年は今この瞬間間違いなくベルにとっての英雄だったからだ。

「…………大丈夫だな」

それまで、意識を失って倒れていた祖父の様子を見ていた青年は懐から手早く包帯を取り出すと祖父の傷口を止血した。ベルは慌てて

祖父のもとに駆け寄り、息があることに安堵した。この青年も大丈夫だと言っていたし、祖父の顔色が紫に見えるがそれでもきっと大丈夫なのだろう。
「あの、助けてくれてありがとうございます」
「……」
「え、あの！」
祖父の手当てを終えて立ち上がった青年にベルは慌てて礼を言った。しかし青年はそんなベルを一瞥もすることなく歩き出してしまう。
「待って！　待ってください！」
「……」
ベルは必死に青年を呼び止めようとするが、青年は構わず山の中に向かって歩いて行ってしまう。ベルは青年に聞きたいことが山ほどあった。だが山ほどあるため一つの言葉が出てこない。もしここに青年の育手がいるならば「判断が遅い！」と叱責されていただろう。
空回る思考の渦の中、ベルはとっさにその半々羽織を捕らえんと叫ぶ。
「僕も！　あなたのように強い英雄になれますか!!」
その言葉に今までベルの言葉を意に介さなかった青年が足を止め振り返った。深い青色がベルの紅を見つめた。
「……無理だな」
まるで冬の湖のように冷たい言葉がベルの心を握りつぶす。
「僕は……英雄になりたいんです。物語に出てくるような」
握りつぶされた心から零れるように感情が溢れ出す。
「みんなを守れるような。女の子を笑顔にして、仲間と背中を預け合って戦う」
流れる涙は傷の痛みではなく悲しみと情けなさ。
「僕の前では誰も傷つかずに、安心させてあげられるような。そんな……そんな英雄になりたかった」
悔しさでいっぱいになった。
「でも、やっぱり僕じゃ無理なんですよね？」

何より、そんな自分の夢に諦めを抱いてしまった。

「大願成就の是非を他人に委ねるな!!!」

突如としてぶつけられた言葉にベルの顔があげられる。

そこには先ほどまでとは違う、激流のような表情をした青年がベルを見ていた。

「惨めったらしく泣きわめくのはやめろ！　俺はお前が憧れる英雄なんか知らない！　知りたくもない！　だが！　奪うか奪われるかの時に泣きわめくことしかできない弱者が女を笑顔にする？　仲間に背中を預けられる？」

青年は独特な音で息を吸い上げる。

「笑止千万!!」

吐き出された言葉にベルの呼吸が止まる。

「弱者には何の権利も希望も与えられない！　強大な力を前にしたとき、泣きわめくことしかできない奴に女を笑顔にすることはできない！　仲間から信頼され、背中を預けられたりなどしない！　それが現実だ！」

青年は大股でこちらに引き返してくると、地面に転がった祖父の鉈を拾い上げ、それをベルの眼前に突きつける。

「なぜさっきお前は鬼に縋りついた！　そんなことで鬼が止まると思ったか？　なぜ鉈を拾い振り上げなかった！　鬼が心臓を突いても死なないからか！　ならば両の眼は潰してみたか！　首に鉈を突き付けてみたか！　お前は何か守るために戦う一歩を踏み出せなかった！　話し合いで何かを守れるほど、この世界は優しくできてはいない!!」

青年の吐き出され切った息と言葉にベルの涙は止まっており、茫然とすることしかできなくなっていた。そんなベルを見下ろす青年は握った鉈をベルの目の前の地面に突き立てると再び山の中へと歩を進めてしまう。

「あっ……」

それは青年を引き留めようとして出た言葉だったのか、それとも青年の視線が外れ緊張の糸が切れたため息がこぼれただけだったのかもしれない。そんなベルに青年は最後に一瞥をくれると顔を山に向けたまま言葉を紡ぐ。

「かつて、鬼に家族を殺され妹も鬼にされ、お前のように泣き蹲り懇願することしかできなかった男がいた」

青年の言葉は再び凪いだ海のように静かに懐かしむような声色になっていた。

「だがその男は剣を取り、苦難の果てに最後には仇をとり妹も救った」

短い言葉でまとめられたそれはベルの想像をはるかに超える苦難があったのだろう。自分に青年が言う男のように剣を取ることができるだろうか。命を懸けることができるだろうか。

ベルの幼い未熟な精神がひび割れようとしたとき。

「だから、お前に覚悟があるなら、次はお前が繋げ」

ひび割れようとした精神が薄い膜で包まれた。

青年はそれ以上は何も言わなかった。

「僕にも繋げますか……あなたのように、その男の人のように……」

「ええ、きっと繋げますよ。だってあの天然ドジっ子さんが繋げたんですもの」

「!?」

背後から現れた声に飛び跳ねるように振り返る。いつの間に現れたのかそこにいたのはベルが見たこともないほどの美少女がそこにいた。蝶の羽のようなきれいな羽織に蝶の髪留め、全体的に蝶のように美しい人だった。

「全く、何が大丈夫だな。ですか。このおじいさん毒を貰ってるじゃないですか」

そう言う女性は祖父の腕に何やら薬品のようなものを注射器で注入していた。心なしか先ほどまで紫色だった祖父の顔色がいつも通りの血色のいい色に戻っていっている。

「胡蝶がいるから大丈夫だな、と言った」

「言ってませんよ……」
「あ、あの」
「あぁ、坊や。大丈夫ですよ。坊やのおじいさまは命に別状はありませんから。すぐに起き上がりますよ」
「え、あ、はい。ありがとうございます」
「……御屋形様がお待ちだ」
「はいはい、わかっていますよ」
そう返事した女性は立ち上がり青年の横まで駆け寄っていった。きっとこのまま二人は帰っていくのだろう。ベルは新たな女性の登場に余裕ができたのか、聞きたかったことを言葉に出せた。
「あの！　お二人の名前は！」
「そう言えば、名乗っていませんでしたね。私は鬼殺ファミリア、胡蝶しのぶです。こっちが」
「……」
「と～み～お～か～さ～ん???」
「……冨岡義勇だ」
「……二人は冒険者なんですか？」
「んー、そうですね」
胡蝶しのぶと名乗った女性は唇に人差し指を当てて考え込むと納得したように言う。
「私たちは言うなれば〝鬼狩りの冒険者〟ですね」
「胡蝶」
「はいはい」
話し込むしのぶに焦れたのか、義勇はしのぶを待たず一人歩を進める。しのぶはしょうがないといった風に笑うと、ベルに軽く手を振ったのちに二人は夜の闇へと消えていった。
「鬼狩りの……冒険者」
「……ベル」
「お祖父ちゃん!?」
意識を取り戻した祖父が体を不格好に起こしながらベルに手を伸ばした。

「無事か、ベル……？」
「うん、うん！　鬼狩り様が助けてくれたんだ……」
「そうか、鬼狩り様が」
「お祖父ちゃん」
伸ばされた祖父の手を両の手で握りしめた。
「僕、強くなるから。あの人が僕に繋いでくれたものを、今度は僕が誰かに繋げるように強くなって見せる」
「ベル……」
ベルは戦いに向かない。冒険者に向かない。そのことを誰よりも理解していたのは祖父だった。だがそれでも今この時だけは、祖父はベルの覚悟を無碍にはできなかった。
だからもう片方の手でベルの頭を力強く撫でた。
「頑張るのじゃぞ」
「うん！」
この月夜の晩、夜の世界で、また一つ繋がれた炎がここにはあった。

一幕〝白兎、オラリオに立つ〟

「こ、これがオラリオ」

馬に引かれ揺れる荷馬車の上で少年は息をのむ。

目の前に広がるのは都市全体を囲うように聳え立つ堅牢かつ巨大な城壁。壁門は行きかう多くの人々の声で溢れている。男も女も、ヒューマンもエルフもドワーフも、小人種（パルゥム）、獣人、アマゾネス、多くの種族の人々で賑わっていた。それはこれまで少年がいた田舎からでは考えられないような光景だった。何より、オラリオをこれほどの都心とする所以。雲に隠れて最上階が見えないほどの白亜の摩天楼。

『バベル』

そしてその地下に広がる底の見えない迷宮―ダンジョン―。

迷宮都市オラリオ。ついに少年、ベル・クラネルは憧れを胸にここもでやってきたのだ。

「なんだ坊主！　オラリオに来るのは初めてかい？」

同じく荷馬車に乗っていた商人らしき男性が、珍しそうに見物するベルに声をかける。

「はい！　僕が今まで住んでいたところとは全然違くてすごいです!!」

「ははっ、そう言ってもらえるとここで商売してる身としては嬉しいね。坊主は短剣を持ってるってことは、冒険者志望か？」

「えっと、まぁそんなところです」

ベルは腰に携えた短剣――短刀を一瞥し、苦笑いを浮かべる。

「そうかいそうかい！　んじゃ、大物になったら是非ともうちの店を贔屓にしてくれよな！」

「そのときはよろしくお願いします！」

「おう！　と、俺らの番が来たみたいだな」

「お先にどうぞ」

「悪いな。坊主も冒険者頑張れよ！」

荷馬車がゆっくりと止まり、どうやら関所の手続きの番がやってきた。ベルは商人の男性に順番を先に勧める。商人は笑顔を浮かべ、ベ

ルに応援の声をかけると荷馬車から降り、関所の門番のもとまで歩いて行った。
「五年か……長かったなぁ」
ベルは順番待ちをするさなか一人感傷に耽る。ベルの祖父が亡くなったのは五年前。ベルがまだ九歳の時だった。どうやら七年前のあの鬼の一件がたたったようで、祖父曰く想定より早い老い先になってしまったらしい。ベルは泣いた。それはもう号泣だった。まだ九歳だったベルにとって唯一の肉親であった祖父の死の恐怖は大きかった。そんな泣き叫ぶベルに祖父が残した言葉は何だったか。確か――
『ベルの夢はなんじゃ？』
そう問いかけた祖父の言葉にベルはなんと返したのだったか。ベルの答えを聞いた祖父は満足げに笑ったのを覚えている。
そして祖父は一枚の地図と手紙をベルに渡した。その場所に行けばきっとベルの夢を叶えるための足掛かりになるはずだ。ベルはその言葉を信じ祖父が亡くなった後、地図の示す場所まで行った。そこで出会ったのが五年間自分を育ててくれた第二の祖父ともいえる師匠との出会いだった。
「とはいっても、出会ったばかりのころは『この子はだめだ。才能がない』って言われちゃったんだけどね……実際五年も掛かっちゃったし」
そういって「とほほ」と溜息を吐くベルに順番の呼び出しがかかった。ベルは慌てたように返事をすると、短刀を押さえ、荷馬車を降りた。少年の髪と同様、初雪のような白い生地に、ススキの影が刻まれた羽織を靡かせながらベルは門番の前に立つ。
「ふむ、ベル・クラネルと。貴殿は何のためにこのオラリオに来た理由は？」
門番は渡された書類に目を通しながらベルに問いかける。
ベルは口を大きく開け、決意に満ちた表情で答える。
「鬼狩りの冒険者になるために来ました!!」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「迷った……」

意気揚々とオラリオの中に入ることはできたものの始めてくる都市にベルは絶賛迷子中になっていた。師匠から渡された地図も古いものなのか、道順があやふやであり、どっち方面が北なのか南なのかよくわからなかった。そうして気が付けばベルはあれよあれよと裏道に入り、メインストリートに出ることすらできなくなっていた。こんなことなら門番の人に道を尋ねるべきだったと後悔するベルだが、鬼狩りの名前を出した途端門番が慌てたようにベルを先に進ませてしまったため聞くことができなかったのだ。

ベルを見送る門番の視線が憐れみを含んでいたことにベルは気が付かなかった。

「どうしよう。このままじゃ目的地にたどり着けな――たッ」

ベルが地図を見ながら裏道を歩いていたせいか、目の前からいきなり現れた男に気が付かず正面からぶつかってしまう。軽くよろけたベルは慌ててぶつかった男に頭を下げる。

「ご、ごめんなさい！　大丈夫ですか!!」

「ああん！　てめぇよくもまぁ舐めた真似してくれたな!!」

謝罪するベルを怒鳴りつける男の顔を見上げるベルは息をのむ。そこにいたのは大剣を背負い、レザーの防具を身に着けた顔に傷跡がある冒険者だった。冒険者はベルを睨みつけながら鎧に覆われた胸のあたりをわざとらしく押さえながら言う。

「いてぇじゃねぇか！　これは折れたな！　骨が折れたな!!」

「えぇ!?　だ、大丈夫ですか！」

嘘である。しっかりと防具を身にまとっている場所、さらにベルが軽くぶつかっただけで骨が折れるわけがない。そんなに貧弱ならこの男は冒険者などをやれるはずがない。そんなことはこの都市にいる者なら誰でもわかることだろう。この男が質の悪い当たり屋であることに。しかし残念なことに今ここにいるのは純粋無垢が兎の皮をかぶった少年であり見事に騙されてしまった。

「あぁ駄目だな。折角これからダンジョンに行く予定だったのにどうしてくれるんだガキ？」
「えっと……どうすれば」
「そうだな、とりあえずこの傷を治すために必要な最高級ポーション代とそれに今日潜れないダンジョンで稼ぐはずだった魔石代。占めて十万ヴァリス払ってもらおうじゃねぇか！」
「じゅ、十万ヴァリス!?」
ベルは提示された途方もない額に目を見開く。一度の食事にかかるヴァリスはおよそ５０ヴァリスであり、最も安い体力を回復するためのポーションでも５００ヴァリスで買うことができる。骨を治すためとは言え、それでもポーション代は一万ヴァリスあれば十分だろう。そもそもの話、たかが折れた骨を治すために最高級ポーションは絶対に必要ないし、本当にそのレベルのポーションを買うのであれば十万ヴァリスなどで済むはずもない。
もっともそれに気づけるほどベルはこの都市の物価や物の効果を知らなかった。だからこそ、自分が当たり屋に目を付けられて法外な額を吹っ掛けられていることに気が付くことはできなかった。だからと言って十万ヴァリスもの大金をベルが持っているはずもなく。
「十万ヴァリスなんて大金持ってません!!」
正直に持っていないことを告げるベルに男は下卑た目線でベルの腰に携えられている短刀に目を向ける。
「ち、しょうがねぇな。まぁ俺は心が広いからよ、お前が今持っている持ち金全部と腰に差してる武器で許してやらねぇこともないぜ。俺は優しいからなぁ」
「え？」
ベルは自分が持つ短刀に目を向ける。これは自身が修業時代から使っており、師匠から譲り受けた大切なものだった。この短刀の値段がいくらかはわからないが、男の反応からすると自分が今持つ数千ヴァリスとこの短刀では十万ヴァリスには届かないようにベルは感じた。それで許してくれるのであればこの冒険者は確かに優しいのかもしれない。

「ごめんなさい！　でもこの短刀は師匠から譲り受けた大切なものなのでお渡しすることはできません！」
それでも師から譲り受けた大切なものを手放せるベルではなく、誠心誠意の謝罪を込めて頭を下げていた。その瞬間、ベルの腹に衝撃が走る。
「渡せねぇじゃねぇ！　俺様に渡すんだよ!!」
蹴られたのだ目の前の男に。腹と肺から無理やり空気が吐き出される。ベルは思わず腹を押さえて蹲ってしまった。そんなベルに構わず男はベルの踏みつけるように何度も何度も蹴りつける。白雪のように汚れを知らなかった羽織は、男の靴についた泥で汚れ見る影もない。ベルは必死に呼吸を整えようと息を吐く。
「こっちが下手に出てれば調子に乗りやがって！　てめぇの羽織を見てるとな、あいつらのことを思い出してムカつくんだよ!!」
あいつらのことが誰かはわからなかった。けれどこの男がベルを標的にした理由はベルが弱そうだからだけではなく、この羽織を纏っていたのも理由だった。
「もういい、てめぇいっぺん死ね」
そう言って男は持ち上げた足を今度はベルの背中ではなく、その蹲る頭に叩き落そうとした。必死に呼吸を整え避けようとするベルだが間に合わない。そう諦めかけたベルが目を閉じた時だった。

「何してるんだぁあああああ!!」（ゴンッ）

第三者の声とともに鈍い音が裏路地に響き渡った。
その声に驚いて顔を上げたベルの目に映ったのは、〝市松模様〟の羽織だった。少年の髪色は赤みがかった黒。耳には特徴的な日輪の

耳飾りがつけられている。
「蹲る少年になんてことをしてるんだ!!!」
そこにいたのは。
「炭治郎さん……」
竈門炭治郎、ベルの兄弟子の姿だった。
「大丈夫ベル？」
「は、はい」
振り返った炭治郎は心配そうにベルに手を伸ばした。久しぶりに再会した、変わらない優しさを持つ兄弟子に涙腺を緩くしつつベルはその手を両手で握りゆっくりと立ち上がった。
「ところで、何があったんだベル？」
「それが「いいいいいやあああああああああ」」
ベルが事情を話そうと口を開いたとき、かぶせる様にして甲高い男の声が追加された。ベルはびっくりし、炭治郎は呆れながら声の方向を見る。そこにいたのは黄色い鱗文様の羽織を羽織ったタンポポのような金髪を持つ少年だった。
「何!? 何なの！ 炭治郎が急に走りだしたと思えばベルがボロボロだし！ 大丈夫？ 知らないおっさんが白目向いて倒れてるし！ はっ、さっきの鈍い音！ 炭治郎、お前そこのおっさんに頭突きしただろ！ 絶対そうだろ!! 死んじゃったらどうするの?? やばいよやばいよ!!」
相も変わらず怒涛のように吐き出される言葉の激流を呆然と聞くしかできないベルに対し、炭治郎は慣れた様子で金髪の少年を一刀両断する。
「うん善逸はちょっと黙ってて」
「たんじろおおおおおおおおおお」

その後も騒ぐ善逸と気絶した男は捨て置き、炭治郎はベルから歩きながら事情を聴いた。もっともベルの目線からの話なのでベルはしきりに悪いのは自分だと訴えたうえでだ。
「いやいやベル、それ騙されてるよ」

話を聞き終えた二人、ちゃっかり着いて来ていた善逸は開口一番信じられないものを見るかのような目でベルを見ていった。炭治郎も困ったような笑みを浮かべつつもそれに同意した。
「確かにベルのそういうところは美徳だと思うけど、今回は騙されてるな」
「そうなんですか？　僕てっきり大けがさせちゃったのかと」
「少なくとも俺には骨が折れてるような音は聞こえてないよ」
「俺もそんな匂いはしなかったな」
「よかったぁ」
「いやいやよくないでしょ！　騙されかけたんだよ!?」
「こら善逸、ベルが怪我をさせなかったのはいいことだろ」
「その代わりベルがボコボコにされちゃダメでしょ!!」
「あはは、本当に大丈夫ですよ善逸さん」
「やだなにこの子、天使？　天使なの炭治郎？」
「？　ベルは俺の弟弟子だぞ？」
「あ、でもさっきの人置いて来ちゃいましたけど大丈夫かな……」
「いいのいいの、どうせギルドに突き出したって厳重注意で終わるだろうし。むしろ関わるだけ厄介ごとになるんだから」
「正直もっと説教するべきだと思ったけど、こっちもやりすぎたから。痛み分けってことで」
そんな二人のやり取りに苦笑いを浮かべつつ、さっきの事件が不幸中の幸いだったとベルは捉えた。
「それにしてもお二人と会えてよかったです」
「久しぶりだね。鱗滝さんのとこに会いに行ったきりだから一年ぶりかな」
「ベルもようやく修行を終えて俺たちの仲間入りかぁ」
「はは五年も掛かっちゃいました」
「それでもしっかり修行を終えてきたんだ！　ベルは偉いぞ！」
「ありがとうございます！」
「うーん、この長男力」
そうこう話しているうちに目的地が見えてきた。オラリオの北部、

そこにその館は存在していた。周りがレンガ造りの家が立ち並ぶ中その屋敷と呼ばれる建造物は異質を放っていた。広い面積の土地を囲むようにして石造りの壁が立ち並ぶ。重厚感ある木と鉄で作られた門をくぐれば、そこは三階建ての木造建築が広がっていた。庭には池？がのぞき見でき、これが風流というやつなのだろうかベルはあたりを見渡した。

「ここが鬼殺ファミリアの本拠地ですか……」

「それに近い処だね」

「……？」

「それよりさぁベル」

炭治郎の言い回しに違和感を覚えるベルだったが、善逸から別の話題が提示された。

「今更だけど、本当にここファミリアに所属するつもりなの？」

「え？」

「善逸……」

「いやさ炭治郎、俺たちはあれがあれだからあれだけど。ベルは違うじゃん？　確かに五年間修業してきたのはすごいと思うし、ベルが俺たちのファミリアに入ってくれたら嬉しいけどさ。他のファミリア曰く」

―鬼殺ファミリアはまともじゃない―

その言葉に、重みにベルは息をのむ。

心配げな表情でベルを見る善逸はなおも問う。

「俺はさ。炭治郎もそうだろうけど、ベルのこと大好きだぜ。だからこそ、真っ当な冒険者に憧れるなら他のファミリアの方が……」

「善逸、その話はベルが鱗滝さんに預けられた時にしただろう」

「そうだけどさぁ」

二人の視線を集めるベルはあの日のことを思い出す。

自分と祖父を助けてくれた二人の鬼狩りのことを。

自分を震え上がらせたあの言葉を。

自分もああなりたいと思った。

誰かを救える英雄になりたいと思った。

冒険者でもモンスターから誰かを、可能ならばかわいい女の子を救うことはできるだろう。
でもきっと、あの日のベルを救うことはできない。
だからこそ。
「僕は炭治郎さんや善逸さんと一緒に、鬼とモンスターと戦いたいです」
鬼狩りの冒険者になることを決めたのだ。
「そっか……勇気の音が聞こえるよ」
「そうだな。ベルならきっと大丈夫だ！」
「頑張ります！」
「それじゃ鱗滝さんからも聞いてると思うけど、入団試験は明日からだから今日はさっさと風呂入ってゆっくり休めよー」
「しっかりご飯を食べることも忘れずにね！」
「はい！」
館内を案内されながらベルは鱗滝に聞かされたことを思い出す。
そう、この鬼殺ファミリアには入団試験があるのだ。
それこそが他ファミリアから鬼殺ファミリアが畏怖され嫌悪される由縁の一つ。

≪鬼殺ファミリア入団試験・神の恩恵（ファルナ）なしの状態でダンジョン六階層にて五日間生き延びろ≫

二幕〝異常と覚悟〟

「おい、あれ……」
「あぁ、鬼殺ファミリアの〝神楽〟だ」
「もう一人は誰だ。あんな白髪の小僧、見たことないぞ」
「新入りか？　ってことは」
「ちっ、またあれか。鬼狩りかなんだか知らねぇがお高く留まりやがって、ムカつくぜ。ギルドは何考えてやがる」
「やめろって、〝神楽〟たちは悪い奴じゃないだろ」
「じゃあお前は、あの入団試験を認めるってえのか!!」
「そ、そういうわけじゃ……」
「なぁ入団試験ってなんだ？」
「あんお前最近来たやつか？　なら知らねぇのも無理はないか」
「鬼殺ファミリアって言えば、ロキファミリアとフレイヤファミリアに並ぶ三大巨頭の一角だろ？　なんだやっぱ有名ファミリアでも悪どいことやってるのか？」
「いや、悪どいって言うか何と言うか」
「鬼殺ファミリアの人たちは基本いい人ばっかなんだよ。変な奴も多いけどかわいい女の子多いし。あそこに歩いてる〝神楽〟だって、基本優しい好青年だぞ……ただ」
「ただ？」
「「あそこのファミリアはまともじゃない」」
「まともじゃないって、そんなのトップファミリアの連中みんなに言えることだろ」
「いや、そうじゃない。確かに他の二つも化け物集団って言われればそうだが、鬼殺ファミリアはなんて言うか。あり方が異質なんだ」
「異質って？」
「他二つのファミリアはダンジョンを開拓する『探索系』のファミリアだろ？　だけどあいつらはダンジョンの攻略には興味がない」
「はぁ？　生産系か商売系のファミリアなのか？　結構な武闘派ぞろいだって聞くぞ」

「あぁ、ダンジョンに潜ってモンスターを狩って魔石やドロップアイテムを売ったりもする。だけどあいつらからしてみればそれは資金調達の手段の一つに過ぎない。あいつらの本質は『鬼狩り系』なんだとよ」
「鬼狩りって……ゴブリンやオーガ目当てってことか？」
「ばっかお前！　どんだけオラリオから離れた田舎から来たんだよ」
「うっせぇな！　関係ねぇだろ！」
「いやいやオラリオの周辺国家にいて、鬼のことを知らない奴はいねぇぞ多分。まぁ俺も実際に見たことがあるわけじゃないんだが」
「オラリオ特有のモンスターなのか？」
「いやあいつら曰く、人でもモンスターでも喰らっちまう化け物らしいぞ」
「はぁなんだよそれ。ただのモンスターの異常種じゃんか」
「だからモンスターじゃなくて鬼なんだって」
「だから――」
「お前ら落ち着け！　話がどんどんズレていってるぞ」
「はっ、そうだった。それで、入団試験ってのは何なんだ？」
「あぁ悪い、えっとなあいつらのファミリアの入団試験っていうのは」
―神の恩恵（ファルナ）を与えてない奴をダンジョンの中で五日間生き残らせるってやつなんだ―

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あの炭治郎さん、僕たち目立ってませんか？」
「はは、ベルを心配するニオイを周りから感じるよ」
同時に鬼殺ファミリアへの嫌悪も一緒にねと炭治郎は内心つぶやく。
ベルがオラリオに到着した翌日。泥だらけになっていた羽織も

真っ白に元通りに洗濯してもらったベルは、これから試験開始のダンジョンへと行く前にギルドに寄らなければならないという炭治郎とともにギルドへと向かっていた。
メインストリートを歩きながら周囲から向けられる視線に気まずさを覚えながらベルは炭治郎に話しかける。
「そ、それにしても鬼殺ファミリアってやっぱり有名なんですね！」
「そうだな。柱の皆さんも強いし、一応オラリオ三大巨頭って呼ばれてるね」
「おぉ！　すごいです!!　義勇さんも柱なんですよね？」
「そうだよ。〝水柱〟冨岡義勇、俺たちの兄弟子に当たる人だね」
「あんなすごい人と兄弟弟子になれるなんて……」
「義勇さんは本当にすごいんだ」
「はい！　かっこいい人です!!　そう言えばさっきから聞こえる〝神楽〟っていうのは炭治郎さんのことなんですか？」
「うん、流石に俺にはまだ柱の二つ名は重たいからね」
「そうなんですか？」
「まだレベル４だし、まだまだあの人たちには追い付けないよ」
「レベル４って十分すごいんじゃ……」
「ありがとうベル！　でも柱の皆さんに追いつけるよう俺も頑張るから！」
「あはは……」
向上心溢れる兄弟子を尊敬を抱きつつベルは目の前に近づいてきた建物を指さした。
「あれがギルドですか？」
「そうだよ。今回の試験はベル一人だからもう中に入るよ」
「わ、わかりました！」
白い巨柱で作り出された荘厳な万神殿。それがここオラリオにてダンジョンの管理を行っているギルドであった。中に入り見渡せば多くの冒険者たちが賑わっている。魔石の売買から冒険者のケアまで多くのことを担っているギルドである。
炭治郎はあたりをキョロキョロ見渡すベルを引き連れてギルドの

カウンターまでやってくる。
「エイナさんお疲れ様です！」
「あれ炭治郎君おはよう。今日はなんのよ」
炭治郎が挨拶したのは眼鏡をかけたハーフエルフの女性職員エイナ・チュールだった。彼女は炭治郎の姿を確認すると笑顔で挨拶を返してくれたのだが、隣に立つベルの姿を認識するとその表情が固まってしまう。
「今日はこっちの彼の、鬼殺ファミリアへの入団試験を行う許可を取りにやってきました」
「ベル・クラネルです！　よろしくお願いします！」
そう明言し、主神から預かってある書類を提出したところエイナの固まっていた表情から笑顔が抜け落ちる。机の上でこぶしを固く爪が食い込むほど固く握りしめながら、絞り出す声を上げる。
「まだあの入団試験を行うつもりなんですか」
「エイナさん？」
「いい加減にしてください！　ここ数年間大人しくして改心したと思えば、こんな少年を連れてきて!!」
勢いよく椅子から立ち上がり叫ぶエイナの声はギルド中に響き渡り、あたりは静寂に包まれた。
「っ……失礼しました。申し訳ありませんが個室ブースへと移動してもらってもいいですか」
「は、はい！」
眼鏡越しに見える瞳は人を殺せるんじゃないかというほどの眼光。睨まれた二人は個室へと案内される。
「炭治郎さんどういうことですかぁ！」
「はは、エイナさんすごい怒ってるニオイしてた……」
「ニオイじゃなくてもわかりますよぉ!!」
予想外の出来事にあたふたするベルを見ながら炭治郎は予想通りの結果に溜息を吐いた。けれど今回の試験官としての仕事はここから始まっているのだと、呼吸を大きく整えてベルにアドバイスを送る。

「大丈夫だよベル。君の思いを、覚悟を、まっすぐとぶつければきっとわかって貰える」
「……！　わかりました!!」
覚悟を決めた二人はエイナの待つ個室へと入っていく。個室はこれ以上ないほど重たい空気をはらんでおり、炭治郎もそのにおいには冷や汗が止まらなかった。エイナの机越しに置かれている二脚の椅子に二人は座るとエイナは話し始める。
「それで炭治郎君、鬼殺ファミリアはもうあの入団試験を行わないんじゃなかったの？」
「え！　もしかして御屋形様がギルドにそんな話をしてたんですか！」
もしかして自分が聞いてなかっただけで柱である幹部と団長である御屋形様の間でそういう取り決めになっていたのかと、けれど主神には書類を書いてもらっているしと炭治郎は慌てふためき始める。その様子にエイナは怪訝そうな表情をする。
「いや、そういうわけじゃないけれど……でも、ここ数年試験は行われていなかったじゃない！」
「それは入団希望者とその資格者が居なかっただけであって……」
「当たり前でしょ！　あんな試験を行ってると知れば誰も寄り付かないわよ!!」
エイナは一枚の資料を机に叩きつけるようにして二人に見せつける。
「五年前の最後に行った入団試験！　志望者十人中合格者一名、重傷者五名、死亡者四名！　神の恩恵なしでダンジョンのそれも六階層に潜らせるなんて馬鹿げてる!!」
「禰豆子が入団した時の試験ですね」
「そうよ！　あの時もあんな女の子をダンジョンに送るなんて正気を疑ったわ！　その結果がこれよ!!」
実際ギルドの規定上、神の恩恵を刻まれていない一般人が許可なくダンジョンに潜ることは厳罰ものである。神の恩恵を刻まれていない者がダンジョンに入ればどうなるか火を見るよりも明らかだ。だ

からこそ、ギルドがこうして取り締まらなければならないのだ。それなのにどういうわけか、鬼殺ファミリアは多額の税金や様々な約定を対価として、ギルドの主神ウラノスとの協定を結んだのだ。すなわち一年に一度、鬼殺ファミリアが希望した神の恩恵（ファルナ）を持たぬ者を五日間ダンジョンに入れる権利を鬼殺ファミリアは手に入れた。エイナがギルドに就任したばかりのころ、まだギルド職員の本当の意味を知らなかったエイナはその試験の結果、事実に愕然とした。何度も上司にこの馬鹿げた協定を破棄させるよう訴えたが、上司は目を逸らすばかりで聞く耳を持たなかった。

最近になってようやくファミリアは狂ってるが、炭治郎達の根はいい人だと理解しかけたときにこれだと、エイナは怒りで頭が沸騰しそうだった。

「クラネルさん、これがあなたが受けようとしている試験の結果です。それでもまだ試験を受けるつもりですか？」

エイナの視線がベルを穿つ。

「は、はい！　だ、大丈夫です！　炭治郎さんや義勇さんのようにちゃんと修行を付けていただきましたから!!」

「修行って……例の呼吸法とやらですか……」

エイナは顔を俯かせ息を細く吐いた。表情の見えないことが一層ベルには恐ろしく感じ、その予感は的中した。

「どうして！　どうしてわかってくれないんですか!!」

顔を上げたエイナは目から大粒の涙を零しながら顔を染め上げて叫んだ。

「確かに、以前見させていただいた呼吸法は身体能力を強化し、目を見張るものがありました！　けれど、それでも！　結局は人の力に過ぎないんです!!　ダンジョンでは何が起こるかはわかりません！　例え神の恩恵（ファルナ）を持っていたとしても、神の力を借りていたとしても無事で帰れるなんて保証はどこにもないんです！　昨日まで笑いあっていた冒険者が次の日には帰ってこなかった……そんなこと山ほど見てきました！　なのにどうしてあなたたちは人の力を過信できるんですか!!」

泣き叫ぶように思いを訴えるエイナを前にしたベルは例え炭治郎のように鼻が利かなくても、善逸のように耳がよくなくても、彼女の気持ちが胸に響く。今まで多くの冒険者たちがダンジョンに行ったまま帰ってこなかったのを見てきたのだろう。そこに込められていたのは怒り、悲しみ、心配、なによりもベルたちを思いやるいたわりであった。

そんな彼女を前に、どうしてギルドの許可は得ているなどと言って押し通れようか。

ベルは先ほどから黙っている隣に座っている炭治郎に助けを求めるように様子をうかがって息をのんだ。

そこには今までベルが見たことのない炭治郎の顔があった。悲しくも優しい笑み。エイナの思いを一身に受け止めている。そんな慈(やさ)しさがあった。

「ベル、ここで俺がエイナさんを説得して無理やりにでも君に試験を受けさせることは可能だよ」

炭治郎はベルの肩に優しく手を置くと両者の目が合う。炭治郎の真っすぐとした瞳にベルの真紅(ルベライト)の瞳が揺れ動く。

「けどそれじゃきっとダメなんじゃないか。今ここで君の気持ちをまっすぐにエイナさんに伝えなくちゃ、きっとベルは後悔する」

「炭治郎さん……」

「大丈夫、ベルの気持ちは本物だよ」

あまりにも温かな優しさに涙を流したくなる。けれどまだその時じゃない。ベルは真っすぐと今度こそエイナと真正面から向き直る。鋭い視線がベルを貫く中、口を開いた。

「エイナさん聞いてください」

「何をですか？」

「確かにエイナさんの言う通り、神の恩恵(ファルナ)を持っていたとしてもダンジョンを危険な場所で、命を落とすかもしれない」

「それがわかっていてどうし――」

「でも神の恩恵(ファルナ)だけじゃダメなんです!!」

「ッ!!」

「確かに普通の冒険者たちなら神の恩恵（ファルナ）だけで強くなればいい。けど鬼狩りはそれだけじゃダメなんです」
「どうして……？」
「鬼殺ファミリアの皆さんは神の恩恵（ファルナ）を絶対的なものとして見ていないからです」
「なっ」
「確かにモンスターだけが相手なら、神様はダンジョンに潜らない限りほぼ死ぬことはないです……けど鬼は違う。鬼は日の光の届かないところであればどこにだって現れる！」
今も夢に見る。ゴブリンを貪り、自分を襲い、祖父を殺そうとした鬼の恐ろしさを。
神出鬼没な奴らはもしかしたらファミリアの団員ではなく、その神の恩恵（ファルナ）を与える神様を直接殺しに来るかもしれない。実際にかつて鬼の首魁が本拠地に現れたとき、鬼狩りの当主は自爆してまで倒そうとしたという話を聞いた。
「鬼を倒すために使えるものは何でも使う。だからこそ神の恩恵（ファルナ）を身に刻み、鬼たちを狩る。けど、じゃあもし神様が居なくなって僕たちの神の恩恵（ファルナ）が無くなったらどうするんですか……」
「それは！」
「神の恩恵（ファルナ）が無いから戦えない？　それじゃダメなんです！　そうなったとき、ただ鬼に蹂躙されるわけにはいかないんです！　神の恩恵（ファルナ）が無くても戦えるだけの力と覚悟が鬼殺ファミリアには必要なんです!!」
だからこその入団試験なのだとベルは胸を張って言い切る。鬼殺ファミリアは悪意を持ってベルたちをダンジョンに送り込んでいるのではないと。
「けど、だからって……死んじゃったらどうしようもないじゃない」
力なく顔を俯かせ縮こまるエイナの姿は先ほどからは想像も付かないほどベルたちには小さく見えた。そこに表れていたのは納得ではなく諦め。これ以上自分が何を言っても無駄だと言う、受け入れるのではなく壁を作る姿だった。

炭治郎がその姿に目を伏せ口を開こうとした時だった。
「と、いうのは僕が師匠から教えられた鬼殺ファミリアの理念と想いです」
「クラネルさん……？」
「この話を聞いた時、僕はこの危険な試験に納得しました。けど何より、鬼殺ファミリアの皆さんが物語の英雄のように感じたんです！」
そう言ってベルは顔を綻ばさせた。そこには先ほどまでの熱はなかった。けれど温かさがあった。
「僕、小さいころから物語の英雄たちが大好きで、沢山祖父に読み聞かせてもらっていたんです。そこに出てくる英雄たちはまだ神様たちが居ない、神の恩恵（ファルナ）が無い状況でも人を守ってお姫様を救って英雄になるんです。けど所詮は物語り、神の恩恵（ファルナ）のないヒューマンがそんなことできるわけがない。そう言う人たちも沢山いました。けど違った！　炭治郎さんが、義勇さんが、鬼殺ファミリアの皆さんが教えてくれた！　人は、人の力で戦うこともできる。物語の英雄は本当にいたんだって、そう思えるようになったんです」
そこには綺麗ごとがあり、偽善が、傲慢が、夢物語があった。
けれどその姿は確かに――。
「だからこそ、僕も鬼殺ファミリアの皆さんのように人の、英雄たちの力を信じてみたくなったんです」
鬼狩りの冒険者だった。
「あ、でもそんなこと言っておいて、ファミリアに入ったら神の恩恵（ファルナ）を頂いてしまうんですけど。あの、その……」
「ふ、ふふ……」
「エ、エイナさん？」
目の前で笑い始めたエイナにベルの目が見開かれる。驚きに炭治郎の方へと顔を向ければ、頭に軽い重みが乗った。
「すごいぞベル！　ちゃんと自分の気持ちを形にできたな！」
「炭治郎さん……！」
「ははっ、そっかぁ。目の前にいたのは鬼狩りの使命や義務に命を

懸ける男の子じゃなくて、英雄を夢見る冒険者だったかぁ」
「エイナさん、これでわかってくれましたか。ベルは俺たちとは違う。けど立派な鬼狩りの冒険者になります」
「……わかったよ炭治郎君。入団試験のためのダンジョンの立ち入りを許可します」
「ありがとうエイナさん」
「ただし！　絶対に無理はしない。生きて帰ってくるんだよベル君」
「はい！　わかりましたエイナさん」
そうして差し出されたエイナさんの手をベルは両手で握り返すのだった。

鬼殺ファミリア入団試験が、今始まる――。

三幕〝入団試験〟

「畜生っ！　昨日はついてなかった！」

ベルと炭治郎が入団試験のためにダンジョンへと潜ろうとしていた時刻。それはオラリオの都市の一角で起こっていた。道が入り組み、人通りは少なく、道に迷ったら二度と出られないんじゃないかと思うほどの地上の迷宮。男は大剣を背負った冒険者だった。荒くれ物のような相貌には傷がついており、どこにでもいるような冒険者の一人であった。そう、レベル1のまま器の昇華（ランクアップ）を果たせず燻っている万年レベル1の冒険者だった。

そのためか男はいつしか冒険をすることを辞め、弱者相手に当たり屋のようなことをしながら小銭を集める日々を送っていた。しかしどうやら昨日は獲物選びに失敗したのか悪態をつきながら男は歩いていた。

「まさかあのガキが本当にイカレファミリアの関係者だと思うか!?　糞がっ、見誤った！」

男は昨日のことを思い出しながら片手に持った酒瓶を呷る。昨日男が獲物に選んだのは白髪赤目の少年（弱者）だった。メインストリート近くの裏道で迷子になり、あたりを見渡していたことからも田舎から出てきたおのぼりであり、神の恩恵（ファルナ）など刻まれていなさそうな絶好の鴨だった。着ていた羽織は鬼殺ファミリアの団員たちが愛用している羽織たちに重なって見えたが、そんな少年が団員であるはずはないと高を括ったのがまずかった。高レベル冒険者を多く保有する鬼殺ファミリアは、ランクアップできずに燻っている男からすれば嫉妬の対象であり、そんな理不尽な怒りが少年に向けられたのだ。

しかし実際に当たり屋を行ってみれば、少年は最初は言うことを聞いてたくせに途中から反抗してきた。男はその怒りを少年にぶつけ甚振りつけた。そこに突如として現れたのがあの〝神楽（石頭）〟であり、降って落とされた頭突きは男の意識を刈り取っていった。おかげで昨日の収入はゼロ。頭痛もひどいため今日は獲物探しをせずにこうして酒を浴びているわけだ。

「まぁいい。あそこの入団試験って言えば頭がおかしいで有名だからな。あんなガキが合格できるわけがねぇ。ダンジョンでくたばり死ぬって考えれば溜飲が下がるってもん――ってぇ！」
前後不覚になりながら歩いていた男は正面からすれ違うように現れた簡素な服を着た青年にぶつかりヨロケテしまう。奇しくも当たり屋の前段階が完成し、男は酔っぱらっていたこともあり相手も確認せずに怒鳴りつけた。
「どこ見て歩いてんだてめぇ!!　これ骨折れたぞ！　慰謝料払えってんだ！」
「……すみません」
青年はそれだけ言い残し先を歩いていこうとする。男は一瞬唖然とするが、すぐに舐められているのだと頭に血が上り青年の肩に掴みかかる。
「お前舐めてんのか！　金払えって言ってんだよ！　かッ……ね」
青年を無理やり自分側へ振り向かせた男は脅すように金をせびるが、青年の顔を見た途端急に口を閉じる。何を見たのかはわからないがその表情は青ざめ恐怖に震え、いつの間にか男は腰を抜かして地面に座り込んでいた。男より背の低い青年に見降ろされる形になった男はなおも口を開けない。
「ふむ……少々不満だが、此度は貴様でいい」
「な……に、を」
瞬間、男の首に一筋の傷が増えた。大きさだけ見れば大したことのない傷。だが男は首を押さえるように倒れこむ。
「案ずるな。そして喜び平伏せよ。貴様は億が一にも、私を繋ぐ者になる可能性を与えられたのだ」
「あっ……がっ!!」
苦しむ男を見下ろしながら青年は赤い目を細くし一人満足げに頷く。
「再びあの穴倉に戻るのは癪だが仕方あるまい」
青年は男を引きずりながらどこかへと去っていく。
そんな一幕が起こっていた地上の迷宮の名は〝ダイダロス通り〟。

オラリオにまた一つ、不吉な風が吹き抜ける。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

あの後、正式にギルドからベルのダンジョン探索許可を得た、炭治郎達は現在ダンジョンの六階層までやってきていた。薄暗い洞窟にわずかに光を放つ物体で彩られるそこを歩きながらベルは物珍し気に周りを見渡していた。既にベルの腰に携えられていた短刀は引き抜かれており、いつでも戦闘を行える体制が整っていた。

「なんだか僕がダンジョンに入れてることが感慨深いですね」

「一階層でゴブリンを倒したときのベルのはしゃぎ様は凄まじかったな！」

「それは言わないでください!!」

入団試験に使われるエリアは六階層だが、いきなり六階層に行けるわけではない。炭治郎はウォーミングアップとしてここまでくる最中のモンスターをベル一人に狩らせてきた。ゴブリンやコボルドなどの比較的人型と言えるモンスター相手には余裕を持って対処を行えてきたが、ヤモリや蛙型のモンスターであるダンジョンリザードとフロッグシューターの地を這うような存在にはまだ後手に回る様子が見受けられた。とは言え、ここに来るまでに目立った外傷はなく試験を行うボーダーラインは超えていることが見受けられた。

途中、初めてゴブリンを狩れた際には、過去の経験から感極まったベルの喜びようがあったがそこは割愛しよう。

「それじゃ六階層に来たわけだけど。問題、どうしてここが試験階層に選ばれている？」

「はい！　六階層から現れるウォーシャドウってモンスターが鬼に見立てられるからです！」

「そうだ、ちゃんと覚えてて偉いぞ！」

「えへへ」

ウォーシャドウ、六階層から現れる影のようなモンスター。通称、〝新米殺し〟。全身がくまなく真っ黒であり、身の丈は１６０ｃｍの

二腕二足、十字の形の顔に手鏡のような真円上のパーツが組み込まれている。特に注目するべきは、長い腕に三本の鋭利な鉤爪状の指を持っており、これも鬼の鋭利な爪に見立てられる。多くの新米冒険者の壁のような存在である。

このような理由から、鬼殺ファミリアはこの六階層を試験エリアとしているのだが、当然周りから見たら新人どころか、神の恩恵（ファルナ）すら持たぬものをここへと連れてくるなんて自殺行為であった。現にここに来る途中ですれ違った冒険者たちはベルの鎧すら身に着けない格好に怪訝な表情を浮かべていた。

そんな会話を交わしながら歩いていると、炭治郎達は突き当りのルームの一角へと到着した。そこには今しがた話題に出たばかりのウォーシャドウ三体が屯っていた。まさに〝影〟と形容するにふさわしい不気味な姿にベルは息をのみつつ様子を観察する。幸いまだルーム内には入っていないためかウォーシャドウがこちらに気付いている様子はない。どうするべきかと炭治郎の方を伺うえば。

「よし、じゃあベル。早速あの三体を倒してきてくれ！　このルームを今日から五日間の拠点にするぞ！」

「わ、わかりました！」

ベルの緊張した様子に苦笑いを浮かべる炭治郎は、そっと腰を押すようにベルをルームへと向かわせる。

「大丈夫だベル。呼吸を整えれば勝てる」

「……！　わかりました」

覚悟を決めるベルは言われたとおりに呼吸を整えルームへと向かう。

それまで静かだったルームに音が響き渡る。「ヒュゥゥゥゥ」と奇妙な呼吸の音。三つの十字の視線がベルへと集まり、新たな獲物が来たとウォーシャドウらは肩を揺らす。

（大丈夫……僕にもできる。できる！）

三つの足音がベルに向かって駆けてくるのが分かった。

振り上げられる鉤爪（凶器）。

ベルの心臓を狙った攻撃。

ベルはもう一度呼吸を行う。

「水の呼吸　肆ノ型……ッ！」

義勇や炭治郎たちに比べればまだまだ拙い。けれどそれは確かに――。

「打ち潮ォ!!」

始まりの日の技であった。

岸辺に打ちつける潮の如く淀みない動きで斬撃を繋げる波状攻撃が一体のウォーシャドウの頸を切り落とし、二体のウォーシャドウの腕を切り落とした。

「ッ!!」

突如として繰り出された水流を幻視させる剣技に生き残ったウォーシャドウらは動揺し、炭治郎は満足げに頷いた。

ウォーシャドウは咄嗟に残った二体でベルを挟み込むようにして突撃する。だが、それではまだ足りない。水の呼吸の本領はここからだと、ベルは切った勢いのまま、上半身と下半身を逆方向に捩じるように力をためる。

「水の呼吸　陸ノ型！　ねじれ渦!!」

捩じり溜めた体から放たれた強力な回転を持つ斬撃は二体のウォーシャドウの体をまとめて両断した。わずか数手のやり取りを得て、その場には三つの魔石が転がった。ベルは転がった魔石を認識すると、炭治郎に向けて目を輝かせた。

「やりました！　あのウォーシャドウを倒しました！」

「やったなベル！　それだけ戦えるなら油断さえしなければ六階層なら大丈夫そうだ！」

ベルを褒めるように入ってきた炭治郎は、バックパックをその場に置くと軽い拠点作りを始めた。五日間ダンジョンで生き残れとは言うが、もちろん不眠不休で戦い続けろというわけではない。鬼だって

昼間の間は休む時間をくれるのだ。そこまで鬼畜な所業を行ったりはしない。試験者には半日間は一人で六階層を潜ってもらい、時間が来たらこの場所で半日間休憩をさせるというものだ。そのためこの五日間はこのルームを炭治郎が責任をもって安全圏とさせる。

炭治郎はバックパックの中からうっすらと光る手のひらサイズの球体をベルに投げ渡す。

「これは？」

「半日間光り続けて半日間光を蓄えるって機能がある魔道具だ。これが光らなくなったらここに戻ってくるんだぞ。地図は頭の中に入っているか？」

「わかりました！　一階から六階層までの地図はちゃんと覚えてきました！」

「よし、なら試験開始だ！」

「行ってきます！」

ベルは球体を腰のサブパックの中に入れると、炭治郎の合図とともにダンジョンを歩きだした。ここからは炭治郎の同伴はない。何かあったとき助けてくれる人はいない。ベルは恐怖と緊張を胸に、短刀を構えダンジョンの闇へと向かって行った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「た、ただいま戻りました……」

あれから半日経ち、若干疲労が顔から窺えるベルが炭治郎の元へと戻ってきた。何度か転がったのか、白い羽織のところどころに泥が付着しているが目立った怪我はなく、無事一日目を終了できたようだ。戻ってきたベルにどこか安堵の表情で迎え入れた炭治郎は、竹皮に包まれたおにぎりをベルに差し出した。

「お疲れベル。おなか減っただろ？　隠の人がおにぎりを持ってきてくれたから食べるか？」

「は、はい。いただきます！」

疲れ渡った体に塩の効いたおにぎりが染み渡る。気が付けば差し

出されたおにぎりは食べきっており、満面の笑みで礼を言う。
「美味しかったです！　ありがとうございます!!」
「よかった。日の射さない洞窟で五日間だからな。せめて朝夜の食事だけは保存食以外のものを食べさせてやってほしいって隠の皆さんが持ってきてくれるんだ。地上に戻ったら彼らにも礼を言うんだぞ」
「隠の皆さん……ですか？」
「えっと、簡単に言うと、俺たち戦闘部隊のサポートをしてくれている鬼殺ファミリアの人たちだ」
「そんな人たちもいるんですね！　こんな美味しいものを持ってきていただいて、帰ったらちゃんとお礼を言います！」
「そしたら刀の手入れをして寝てよし！　まだ一日目だからしっかり休むんだぞ！」
「はい！」
ベルは炭治郎から道具を受け取ると、刀の手入れを始めていく。もちろん本格的なものは行えないので、応急処置的な手入れだが。手入れを行うベルと見ながら炭治郎は口を開く。
「そう言えば、ベルはこの試験が終わったら自分の日輪刀を受け取ると思うけど、変わらず短刀にするのか？」
「そうですね……短刀に慣れちゃったのでこのままにすると思います」
日輪刀、特殊な素材を使って作り上げられた刀であり、日のもとにさらす以外で唯一鬼を殺すことができる武器である。
炭治郎や義勇が持っている物は一般的に思い浮かべられる長さの刀であるが、ベルが持つものは短刀と呼ばれるサイズものだ。ベルも最初は炭治郎達と同じ長さの物を使っていたのだがどうにも合わず、鱗滝が試しに短刀サイズの物を渡したところベルもこちらの方が使いやすいということで決まったのだ。そのためか普通の日輪刀に比べて小回りは利くものの、リーチと威力が少し劣るというのが現状である。
炭治郎もそのことを気にして聞いてみたが、今更変えるには短刀は

ベルの手に馴染みすぎていた。炭治郎もわかっていたのかそれ以上は追及しない。
「ベルの日輪刀は何色に染まるのか楽しみだな」
「色変わりの刀でしたっけ？」
日輪刀の別名は色変わりの刀として呼ばれており、触れた剣士の呼吸の適正に合わせて色が変わるという刀だ。義勇であれば青色に染まった刀であり、水の呼吸の適正を示している。染まった刀の色は、他の剣士が持とうが生涯変わることはないとされており、今ベルが持つ青色の日輪刀もベルによって染まったものではない。なお一定の力量を持たぬ剣士が持っても適正はわからぬため、基本試験に合格しファミリアに入ることで自分の日輪刀が得られるのだという。
「確か、水の呼吸の適正は青色でしたっけ？　あれ、でも……」
ベルはそこまで言って炭治郎の持つ日輪刀を思い出した。炭治郎の持つ日輪刀は確か黒色ではなかったかと。
「あぁ、俺の適正は水の呼吸じゃなかったらしくてね。それはおいおい説明するよ」
「はぁ」
「ともかく、試験はまだ四日あるんだ。疲れを残さないようしっかりと休むんだぞ？」
「はい！」
日輪刀の手入れを終えたベルはテントの中に入り、渡された毛布に体を包み眠る。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

そして運命の試験最終日がやってくる。
あと一息で終わるというベルの耳に届いたのは――。
「助けてぐれええ！　お、鬼がああああああああ!!」
鬼と叫ぶ冒険者の悲鳴だった。

四幕〝鬼と姫〟

「血が足りない……肉が足りない……」

男は……否、鬼は彷徨っていた。喉が渇き腹は減り、飢餓が意識を遠のかせる。五日よりも前の記憶がない。自分が何者だったのかも、名前も、故郷も、家族も、何も覚えてはいない。着ていた衣服は肥大化した筋肉により破れ落ち、辛うじてレザーの鎧だけが筋肉を締め付けるようにしながらも残っていた。鋭く伸び切った爪がぎらつく手が持つのは血にまみれた大剣。鎧と大剣、その二つだけが彼が冒険者であったことを示す証。それだけしか彼が何者だったかを証明するものが残っていなかったのだ。

刈り上げられていた髪は汚く伸び切り顔にかかっているため、彼の顔を判断できない。唯一わかるのは髪の隙間からこちらを睨みつける血走った眼と物欲しげに開かれた血まみれの口のみ。

鬼は数日、意識が目覚めてからここではない洞窟を徘徊していた。そこには人もモンスターもおらず、飢えも乾きも満たしてくれる餌が一切いない地獄のような場所だった。彷徨い彷徨い彷徨いぬいた果てに、鬼はいつしか別の空気が流れる洞窟の中にいた。なぜ別の洞窟かわかったか。それは飢餓状態になり敏感になった鬼の鼻に求めてやまないもの。人の血の匂いを感じ取ったからだ。

「お〟おおおおおおおおおお!!」

鬼は雄たけびを上げながら走り出した。鬼は一心不乱に臭いのもとに駆けていった。途中、足元にいた小さい生き物を踏み殺して行った気もするが人の血肉に比べれば些細なことだろう。そうして走りぬいた先、洞窟の曲がり角に奴らはいた。鎧やローブを身に纏った四人組の冒険者だった。鬼を発見した冒険者たちは戦闘態勢をとるが、男の鎧と大剣に気が付いたのだろう。いきなり攻撃をすることはなかった。もっともそれが彼らの取り返しのつかない過ちとなるのだが。

「あ、あんた冒険者？　どうしたんだその恰好、何があっ――へ？」

パーティーのリーダーらしき男が一歩前に出て鬼に事情を聴こう

としたが、その言葉が最後まで紡がれることはなかった。
「リーダー!?」
「いやあああああ!!」
「う〟おおおおおおおおおおおおおおおお〟」
なぜなら次の瞬間、鬼から振り下ろされた大剣により首を切り落とされていたからだ。冒険者パーティーに動揺が走り悲鳴が上がる。鬼は切り落とした冒険者の頸を掴み上げると自身の顔の上まで持ち上げる。そして絞り上げるように握りしめた頭からあふれ出る血を顔いっぱいに受け止め喉の渇きを潤す。
ああなんと甘美な飲み物だろうか。
となると次に鬼が思い出したのは空腹だった。喉の渇きが潤えば、次に求めるのは食欲。鬼は恐怖に震えながらも魔法の詠唱を始めていた女魔法使いに目標を定め大剣を振り下ろす。
「させない!!」
そこで女魔法使いとの間に滑り込むように女戦士の冒険者が剣を盾に立ちはだかる。鬼の大剣を受け止めた女戦士だったが、あまりの重さに膝をついた次の瞬間腹に強烈な衝撃が走る。膝をつき下がった体に鬼の容赦ない蹴りが叩き込まれたのだ。地面へと転がる女戦士に目標を変えた鬼は大剣を捨て、圧し掛かるように女戦士に飛びついた。
「げほっ、放せ！　放せよこの化け物!!」
「ぐひっ!」
「あ、あああああああ!」
眼下にて苦しそうに吠える女戦士に下卑た笑みを浮かべた鬼はその体に食らいついた。吹き出す血と肉の味を噛みしめながら鬼は笑う。美味い。男の血も悪くなかったが女の肉はもっと美味い。そう思いさらに噛みしめようと息絶えた女戦士の首元に食らいつこうとしたときだ。
「ファイアランス!」
女戦士の犠牲で詠唱を完成させた女魔法使いから放たれた炎の巨槍が鬼の頭を貫いた。炎は男の頭を焼き尽くし削り取る。パー

ティーが半壊させた化け物を殺せた安心感から魔法使いは地面にへたり込み息を整え始めた。だがそれはつかの間の安寧だった……。

魔法使いの頭上から影が落ちた。

「え？」

顔を上げた魔法使いの顔が恐怖に染まる。そこにいたのは顔を失ってなお魔法使いに立ち迫っている鬼の姿だった。魔法使いから変な笑いがこぼれ出る。へたり込んだ地面には生暖かい何かが水溜まりを作っており、それが何かを考える余裕さえなかった。頭をつぶしても殺せないこれは何だと恐怖で頭が真っ白になる。ただわかることは、女戦士が稼いだ時間で潰せた頭さえも、肉が盛り上がり修復を始めていることだった。

そんな絶望（おに）を前にした魔法使いにできることは。

「ごめんなさい……ごめんなさいっ。ひっ、あ、いや……ぁあっ」

ただ蹲り泣きながら懇願するだけだった。

そしてその顔があげられることは二度となかった。

先ほどの女戦士よりも肉付きのいい女を満足げに食した鬼はふと周りを見渡し気が付く。もう一人いたはずの男の冒険者が居なくなっていたのだ。斧を持っていた、重装甲の男だった。逃げたのだろう。鬼は気が付いた。だが焦ることはない。あれは鈍足だと、かつての勘がそう告げる。鬼は立ち上がり、捨てた大剣を拾い再び走り出した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「な、なんだ今の叫び声！」

突如として六階層に響き渡った叫び声。ベルは咄嗟に日輪刀を構えあたりを見渡す。目に見える範囲に叫んだ男の姿はいない。モンスターに襲われたのか。いや、男の叫び声には鬼という名前が入っていた。鬼が出た。こんな上層に鬼が出た。

基本的にダンジョンにいる鬼は上層には現れない。なぜならば上

層なんて目立つところにいればすぐさま鬼狩りがやってくるのに加えて、旨味のある餌が居ないのだとベルは教わった。人にしろモンスターにしろ鬼はレベルの高いものを好んで食べる。もちろん下手をすれば返り討ちに合うだけなのだが、それらも相まってダンジョンの鬼が上層にいるのは稀だ。だがいないわけではない。イレギュラーとも言えるだろう。

ならばとベルは声の方向に向かって走り出す。試験はまだ終わっていないが、炭治郎達のように修行を受けた、日輪刀も持っている。炭治郎を呼びに行く時間も惜しい今、鬼と戦えるのは自分だけだ。

「僕が、僕がやるんだっ！」

そうしてベルは叫び声がした通路へと躍り出た。

「僕……がっ……」

瞬間、その光景を目にしたベルの足が固まる。目が見開き、信じられないものを見た。

あの日以来、鬼をこの目にしたのは二回目だった。

目に映ったのは重装甲の男の冒険者と歪に筋肉が膨れ上がった鬼だった。鬼の顔は焼け焦げており修復中なのか下半分しか原型をとどめてはいない。冒険者の片足は折れているのかあらぬ方向に曲がっており、地面に這いつくばりながらもはや逃げることすら叶わない様子。そんな冒険者を楽しそうに見下ろし弄んでいた鬼は折れていない方の片足を高く持ち上げる。必死に抵抗しようと叫ぶ冒険者の攻撃は鬼に効いてはいない。いったい何をしようとしているのか。それはすぐに分かった。鬼は冒険者を投げ飛ばすのでもなく、叩きつけるのでもなくただ持ち上げるだけ。そう、高さ的には上を向いて大きく口を開けた鬼の顔の真上当たり。

それを理解したベルと冒険者の顔から血の気が無くなる。冒険者の抵抗が一層強くなる。叫び声がやがて恐怖に染まり懇願へと変わっていく。その様子はまさに人が新鮮な魚類を生きたまま食べる踊り食いと呼ばれる文化によく似ていた。

早く助けなければ目の前の冒険者は頭から鬼に食われていくだろう。それを理解しているのにもかかわらず。

（動けっ！　動け動け動け動けっ!!）
ベルの足は変わらず固まったままだった。
鬼の残虐さ、卑劣さ、悪意、狂気。それらをベルは今日初めて、戦うものの立場で一身に受け、恐怖した。目の前に食われそうになっている男の顔が自分の顔にブレて見えたのだ。恐怖にのまれ体が固まった。呼吸が浅くなり、速さも深さもバラバラになる。技を繰り出すこともままならない。
どうすればいい。どうするのが正しい。呼吸が遠のくなか、ベルの目に映ったのは。

「た、すけて……」

あの日（七年前）の自分と同じ、助けを求める者の顔だった。
「あ、あ、うあああああああああああああああ!!」
その瞬間ベルは走り出していた。隠密性の欠片もない特攻。師が見れば怒るだろうか。それでも、今ベルに必要なのは、この身を焦がすほどの怒りだった。
「僕はッ！　何のためにッ!!　剣を取ったんだッ!!」
あの日の救われた自分のように、誰かを救うためだろ!!
雄たけびを上げたベルの姿に気が付いたのか、鬼の動きが硬直する。ベルの怒りは数秒の時間を稼ぐ。その数秒がベルの刃を間に合わせた。
「水の呼吸　弐ノ型！　水車ァ!!」
体を垂直方向に飛び込ませ回転を付けた力で振るった刃が冒険者を掴んでいた鬼の腕を両断した。ベルは悪いと思いつつ地面に落ちようとしていた冒険者を離れた場所に向けて投げ飛ばす。
「逃げてください!!」
「そ、その羽織……鬼殺ファミリア!?」
ベルの着ている羽織が目立ったのか、放り出された冒険者は助けが来たのだと安堵の声を上げる。正確にはその候補生ですとベルは口にすることはなかったが心の中でそう頭を下げる。ベルは冒険者を

庇うような位置取りに立って日輪刀を構えた。
「ここは僕に任せて逃げてください！」
「ッすまない！」
男が足を引きずりながらもその場から去っていく音が聞こえる。
だからと言って当然逃げることはできない。ここで逃げればベルよりも足の遅い今の男がまた襲われる。だからこそ今ここで面前の鬼を倒すしかない。
「大丈夫、僕ならできる！　僕はもう無力じゃない!!」
再び恐怖に？まれないよう自分を鼓舞し励ます。
ふと、腕を切られ獲物にも逃げられたにしては嫌に静かな様子をいぶかしむように窺う。鬼は目（？）を見開いた状態で、大剣を持つ方の指でベルを指していた。ベルの羽織を指さしていた。

「羽織ぃいいいいいいいいい!!　羽織を纏った兎ぃいいいいい!!」

途端、沈黙の糸が切れたかのように鬼は地団駄を踏みながら叫びだす。羽織を纏った兎とは自分のことだろうかとベルは一瞬疑問に苛まれる。その間を見逃さない鬼はベルへと突進し、その大剣をベルへと振り上げた。
「ッ」
ベルは咄嗟にそれを防御しようと日輪刀を構える。それは悪手であった。
あるいはここに柱のような膂力が、技術があれば別だっただろう。だがまだ神の恩恵（ファルナ）も刻まれていない、鬼狩りとして認められていない少年が技も放たず受けきるには、その鬼の大剣はあまりにも重かった。
「ぐぁっ!?」
短刀ごと吹き飛ばされ、壁に叩きつけられたベルの肺から空気が吐き出される。受けた手は痺れから震えており、日輪刀を落としそうになるのを必死に我慢する。これが鬼の力。モンスターとは全く違う。
「羽織ぃ！　ウサギぃ！」

なおもベルの特徴を口にしながらこちらに寄ってくる鬼。その口調にはさきほど冒険者を嘲ていた笑みはなく、どこか余裕のない態度だった。今追い詰められているのはベルの方なのにもかかわらずだ。ベルは不審に思い、鬼を観察するようにつま先から頭まで視線を回す。そして息を?んだ。

目のあたりまで修復されていった顔。その鬼の顔に、男の顔にベルは見覚えがあった。

忘れるはずがない、そこには六日前ベルがオラリオの中で初めて会話した男の顔があった。

ベルがよそ見をしてしまったがためにぶつかり怒らせてしまった冒険者の変わり果てた姿があった。

よく見れば、はち切れんばかりの筋肉を締め付けるレザーの防具にも、血にまみれた大剣にも見覚えがあった。

どれも炭治郎の頭突きで気絶してしまい、その場において来てしまった男を証明するものだった。

「そんなっ！　どうして!!」

ベルは知っていた。

教えられていた。

鬼の生態を。その誕生を。鬼は――。

人がある鬼の血を浴びることで生み出される。

「もしかして、僕たちがあの時置いていったから……？」

気絶状態の男を置いていったから、その無防備な状態で鬼に襲われたのではないか。ベルはその可能性に、頬に汗が流れた。実際には男の自業自得なのだが、それを知るすべはベルにはなかった。

再び大剣を振り上げた鬼の姿にベルは受け止めるのではなく転がるように回避する。真横で地面をえぐる音が響き渡る。

「僕のせいでこの人が鬼になった……？」

「どうじてだよぉ!!」

ベルが自分が原因でと口にしたとき、鬼から慟哭が発せられた。

「なんでよげるんだよぉ!?　なんでおまえらばっかり!!」

鬼の目に血涙が流れていた。まるで癇癪持ちの子供のように理不

尽な怒りだった。避けなければ死ぬ。だから避けたのに、攻撃してきた本人が何を言うのだ。けれどベルにはその言葉にそれ以上の思いを感じた。

「おれはなれながった！　なのにおまえらばかり!!」

振り下ろされる大剣の雨にベルは避け続ける。鬼の真意を知ろうにもこうも攻撃されては話すら聞けない。ベルはもう片方の腕も奪おうと呼吸を練り上げる。

「水の呼吸　肆ノがッ！」

大剣にばかり意識をやっていたベルは振り上げられた足をもろに受けてしまう。蹴り飛ばされたボールのようにベルはダンジョンの地面を転がる。

「がはっ、ぐっ、はぁはぁ！」

呼吸を、呼吸を整えるんだとベルは苦しくとも痛くとも呼吸を整える。肋骨の数本が折れる音がした。痛みから脂汗を流すベルはそれでも立ち上がる。

「なんでなんでなんでだちあがる羽織ぃ!!　なんでおまえらばかりづよい!!」

地団駄を踏む鬼を呆然と見る。強いと鬼は言った。

どこがだ、今も防戦一方で痛いし苦しくて地面を転げている弱者はこっちだとベルは叫びたかった。

「おでだっておなじ冒険者だろうが!!　なのになんでおまえらばかりさきにいぐ!!」

強烈な違和感がベルに降りかかる。話が食い違ってるようなそんな違和感。

目の前の鬼が言っているのは自分のことなのだろうか。もしかしたら別の人なのでは。けれど確かに羽織の兎と自分を目の敵に――。

「羽織、兎……」

「羽織ぃ！　ウサギぃ！」

「！」

ベルのつぶやいた言葉に反応するように鬼はまたも叫ぶ。

ベルはようやくその違和感に気が付いた。羽織と兎、これはどちら

もベルを指す言葉だが片方は違う。ベルだけを指す言葉ではない。このオラリオにおいて羽織と聞いて真っ先に思い浮かべられるのはベルではない。

鬼殺ファミリアだ。

「おでだってづよく！　いや、づよぐなったんだぁ!!」

「そうか……そうなんですね」

この人は自分と似ているのだとベルは理解した。あの人たち（鬼殺ファミリア）の人たちの強さに惹かれ、焦がれ、嫉妬したのだろう。彼に何があったかはわからない。けれどきっと彼は鬼殺ファミリアのようにはなれなかった。強くなるのは諦めてしまったのだろう。

ふと、ベルは炭治郎の言葉を思い出した。炭治郎の優しさが詰まったような言葉。

『ベル、鬼は人間だったんだ。俺たちと同じ人間だったんだ。

彼らは醜い化け物なんかじゃない。鬼は虚しい生き物だ。悲しい生き物だ』

ベルはようやくその言葉の本質を理解した。実際に鬼と相対し、叫ぶ彼を見てわかってしまった。

「だからこそ……僕はこれ以上、あなたに被害者を生み出させるわけにはいかない。殺された人たちの無念を晴らすためにあなたに刃を振るう。なにより！」

ベルは日輪刀を構え、鬼を見据える。

「そんな力を、あの人たちと同じ強さだと認めるわけにはいかない!!」

「兎ぃぃぃぃぃぃぃ！」

「鬼殺ファミリア　ベル・クラネル！　行きます!!」

覚悟は決めた。もしかしたら彼は自分が原因で鬼になってしまったのかもしれない。それなら謝っても謝り足りない死んで償っても駄目だろう。償う方法などないのだ。だからこそ、たとえ偽善であろうと、ベル自身が彼を倒さなければならない。

恐怖はない。目の前の鬼は得体のしれない化け物などではないとわかったから。自分と同じあの人たちに焦がれた冒険者だったとわ

かったから。
迷いはない。ベルは今、鬼狩りとなった。
「戦え！　戦えええええええ！」
「がああああああああああああ！」
真上から斜めから真横から振り下ろされる大剣の雨を逃げるために避けるのではなく、攻めるために避ける。
「水の呼吸　参ノ型　流流舞い！」
水流が如き流れる足運びで、大剣を躱し、前へと進み出る。鬼とすれ違う際に両足の健を断ち切る。立っていることすらままならなくなった鬼は膝をつく。ベルはその隙を見逃さず、助走をつけ頸を切るために両手を交差させ飛び込みながら力をためようとする。
「なべるなあああああ!!」
鬼はようやく修復し終えた両手で大剣を後ろに向かって振り投げる。真後ろから首を断ち切ろうとしていたベルに直撃する軌道だった。
「いいえ、終わりです！」
ベルは咄嗟に交差させようとしていた腕を後ろに引き絞る態勢に変える。
「水の呼吸　漆ノ型」
引き絞られた腕から放たれた刃はまるで波紋の中心を穿つが如く。
「雫波紋突き」
刃は投げられた大剣を正確に穿ち、貫いた。
「ぼッ！」
鬼の驚く声と鈍い金属の音がダンジョンに響き渡る。
もう、鬼狩りを止めるすべを鬼は持たなかった。
「水の呼吸　壱ノ型　水面斬り」
再び交差された両腕から勢い良く水平に放たれた刃は鬼の頸を断ち切った。
「あ”、ぁあ”!!」

頸を日輪刀で断ち切られた鬼は死ぬ。体が灰のように脆く散っていく。
「いやだ！　いやだ死にたくない!!　もっど、もっど強く!!」
そう叫びながら動かぬ体で足掻く鬼を前にしてベルはそっと鬼の顔の前で膝をついた。自身の心臓当たりを羽織の上から握りしめながら真っすぐ鬼の目を見る。
「あなたは強かったです。確かに膂力は鬼の力が合わさってのことだと思います。けど、振り下ろされる大剣の雨。鋭く蹴り上げる体術。そこにあなたの冒険が見えました」
「あ……」
自分は何のために強くなりたかったのか。ランクアップを果たしたかったのか。
鬼になり果てた彼はもう覚えてはいない。
ただ薄れゆく意識の中、これほど強さに焦がれた炎の先に。
かつて守ることのできなかった仲間の影を見た。

灰となって消えていった男は影ももう残っておらず、唯一男がそこにいたことを証明するのは、使い古された防具と砕け散った大剣のみだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

月を見た。
否、月のように美しい人を見た。
薄暗いダンジョンの中で彼女の髪が輝いていた。
鬼よりも恐ろしい、純粋な暴力を放つモンスターから自分を救ってくれた人。
「大丈夫ですか？」
それが僕と剣姫（アイズ）さんとの出会いだった。

五幕〝月は輝き、兎は焦がれる〟

「どこに、行ったのッ」

ダンジョンの中を一人の少女が駆けていた。金色の髪を風に靡かせ、鋭い金色の双眼を何かを見逃さないように行き渡らせる美しい少女。蒼色の軽装に包まれた線の細い体は細くとも健康的な肉付を誇っており、その肌はきめ細かく美しい。となればそのエルフや女神にも劣らない繊細な顔立ちなのだが、今はどうやら何かに焦るように歪んでいた。

彼女の名前はアイズ・ヴァレンシュタイン。ロキファミリアの第一級冒険者にしてレベル5の〝剣姫〟の二つ名を神に与えられた少女だった。

そんな彼女がダンジョンの六階層にて何を焦っているかと言えば、一言でいえばとあるモンスターを追っているからだ。

ことの発端は先ほど、五十九階層への進出を目的としたロキファミリアの遠征がある事情から失敗に終わり、予定よりも早い帰還を遂げている時だ。十六階層にてロキファミリアは牛の頭を持つ筋骨隆々のモンスター、ミノタウロスの群れと遭遇したのだ。レベル2の冒険者であろうと一対一（タイマン）では苦しい戦いを強いられる強敵ではあるが、当然第一級冒険者が多く所属するロキファミリアの遠征部隊からすれば塵芥と同然であった。

そのため、ロキファミリアによるミノタウロスの群れの蹂躙が始まったわけなのだが、突如として一匹のミノタウロスがその場から逃げ出したのだ。モンスターが冒険者から逃げ出すなんて緊急事態（イレギュラー）も緊急事態（イレギュラー）。最初の一匹に連れられて他のミノタウロスまで逃げ出す始末。しかも逃げた方向がよろしくなかった。ミノタウロスたちが逃げ出した先、そこには十五階層につながる上り階段があり、まさかのミノタウロスたちはそのまま階段を上りだしたのだ。十五階層まで逃げるだけならばまだよかった。しかし群れは十四、十三と挙句の果てにレベル1とレベル2の境目となる十二階層、上層へと進出していってしまったのだ。

これにはロキファミリアの焦りもさらに強くなる。なぜならレベル1とレベル2の冒険者ではまさに格が違う。このままでは上層のレベル1の冒険者たちがミノタウロス(レベル2)に蹂躙されてしまう。ロキファミリアも、犠牲が出ればその名声に傷がつく失態であり、ミノタウロスを死に物狂いで狩って行った。

そんなミノタウロスも今アイズとベートが追っている残り一体が最後だろう。しかしここに様子がおかしい。先ほどまでは狼人であるベートの鼻を頼りに追いかけてきたのだが、この六階層に来てベート曰く異臭が充満しているせいでミノタウロスの足取りがつかめなくなってしまったのだ。そんな異臭するのかとアイズも小さく鼻を鳴らしてみるが感じ取れない。狼人特有の何かがあるのだろうか。

「めんどくせぇ臭いが充満してやがる。こっちはさっさと牛野郎をぶっ殺さねぇといけねぇのによ！」

「まさか、もう五階層に……」

二人がこのまま六階層を探すか五階層に向かうかを思案していると、攻略ルートから外れた道から足を引きずった男の冒険者が逃げるように現れた。血まみれの冒険者は足を折っているのかそこまでの速さはない。まさかミノタウロスにやられたのではとベートと顔を見合わせたアイズはその冒険者に話しかけた。

「ねぇ、何があったの？」

「あ？　てっひいいい、〝剣姫〟に……それに〝凶狼(ヴァナルガンド)〟!?」

「おい、ビビッてねぇで答えろ雑魚！　誰にやられた？　ミノタウロスか？」

「ミ、ミノタウロス？　何のことだ？」

「ち、外れかよ。もういいお前どっか行け！」

「あの、これ……」

アイズは冒険者に自分の持っていたポーションを渡す。こちらとしても余裕があるわけではないためいいポーションではないが、最低限歩けるようになる応急処置程度にはなるだろう。ベートは忌々し気に「雑魚に構うなアイズ」と叫んでいるが、アイズとしても話した相手がそのままダンジョンから帰ってこなければ目覚めが悪い。冒

険者は受け取ったポーションに感謝を述べると慌てたように叫んだ。
「た、頼むロキファミリア助けてくれ!!」
「あん？　お前がどのモンスターにやられたか知らねぇが六階層ならウォーシャドウあたりだろ。雑魚モンスター相手に逃げてきた雑魚を助けるなんざごめ」
「鬼だ！　鬼が出たんだ!!」
「「ッ!!」」
ベートの見下す発言にかぶせるよう冒険者が叫んだ。〝鬼〟という単語にアイズたちは息を呑む。
「この妙な臭い鬼か！　なんでこんな上層に出てんだよ!!」
「し、知るかよ！　こっちだってパーティーメンバー全員喰われていっぱいいっぱいなんだ!!」
「鬼は、どうしたの？」
鬼を相手に片足折れた状態でここまで逃げてこれるだろうかとアイズが疑問を投げかける。
「助けてもらったんだ。白髪赤目の羽織を着た坊主に……」
「羽織ってこたぁ」
「鬼殺ファミリア？」
「あ、あぁ、多分そうだと思う」
「んだよ、何の問題もねぇじゃねーか！　こっちも急いでんだ、てめぇに構ってる時間なんてねんだよ」
「待ってくれ！　確かにそうなんだが、そうじゃないんだ!!」
なおも食い下がる男にベートの額に青筋が浮かぶ。アイズは間に入るようにして、こちらも急いでることを伝えるように語彙を強めていう。
「はっきりして、何が違うの？」
「れ、冷静になってみて思ったんだ。あんな白髪赤目の目立つやつ、あのファミリアにいたかって……」
鬼殺ファミリアは団員数自体は多いが、その実戦闘要員はそこまで多くはない。戦闘要員は三十人にも満たない少数精鋭であり、その全員がレベル２以上の冒険者である。最後に入ったのは〝神楽〟の妹

の〝鬼狩童子〟のはずなので、それ以来新人は入っていない。確かにアイズたちも鬼殺ファミリアの全員の名前と容姿を知っているわけではないがそんな目立つ見た目なら噂くらい耳にするはずだ。白髪と聞いて出てくるのは〝風柱〟だが、あの恐ろしい形相の男を見間違えるわけがない。ただ、それだけにしては目の前の冒険者は慌てすぎではないだろうか。もしかしたらアイズたちの知らない団員もいるかもしれないのに。

「そ、それでもしかしたらあの噂が本当かもって思ったら……」

「噂？」

「鬼殺ファミリアがあの入団試験をまたやるって噂だ。それも、受けるのが兎みたいな。そ、そう白髪赤目の坊主だって」

「あいつらっ！」

「もしそうならその子、神の恩恵（ファルナ）を持ってない……？」

「た、頼む!!　万が一のことがあったら、助けてもらった身としては心が痛ぇ！」

そう言って頭を下げる冒険者に目もくれず、アイズは今冒険者が逃げ出してきた横穴へと飛び込んでいく。

「ベートさんは五階層を！　私は六階層でミノタウロスと鬼を探す」

「アイズ！　あいつ先走りやがって……！」

おいて行かれたベートは苛立ちを露わにするが、確かにミノタウロスも放っておくわけにはいかない。業腹だが、この階層はアイズに任すことにしてベートは五階層へと向かうことにした。

「あ、あの……」

ポーションを使いなんとか歩ける程度には回復した冒険者は残ったベートに怪訝な表情を向ける。いつものベートであればそれがわかっていたにも拘らず逃げ出してきた冒険者（雑魚）に対して言葉を吐き捨てるところだが生憎そんな気分でもなかった。ただ一つ、気に食わないという表情だけ残し、五階層へと走り出した。

一方冒険者の話を聞き、すぐさま鬼のもとへ走り出したアイズは自

身の装備を確認する。生憎と日輪刀は後続のサポーターがまとめて管理しており、個々人は持っていない。だが話を聞けば鬼殺ファミリアらしき少年が先に戦っているという。ならば最悪少年の日輪刀を借り受ければ問題ないだろうと黒い風が見え隠れする中アイズは走った。

やがて大剣が地面を連続して砕く音と鬼の叫び声らしきものがダンジョンの道を通しアイズの耳に届いた。道から覗き込んだルームそこで行われていたのは。

「戦え！　戦えええええ!!」

そう己を鼓舞するように叫びながら大剣を振り下ろす鬼へと駆け抜けていく白髪赤目の少年の姿だった。白かったであろう羽織は土にまみれ、口には血を吐きだした痕が残っていた。それは鬼との闘いの痕だろう。苦戦しているなら手助けするべきかとアイズは思案する。しかし叫び声をあげ、鬼を狩ろうとする少年の様を見るとどうにも手を出す気にはなれなかった。

「あっ」

鬼の健を切り裂き、その頸に刃を振るおうとしたベルに大剣が投げ飛ばされる。思わずアイズがその大剣を切り飛ばそうかと動き出したとき、少年の顔が絶望ではなく勝利を確信した顔つきへと変わったのを見てアイズは飛び出すのをやめる。その行動は間違っていなかった。少年の繰り出した突きが大剣を穿ち、そのまま振り切られた刃が鬼の頸を落とした。

第一級冒険者から見れば稚拙な戦い。

けれど確かに少年は、神の恩恵（ファルナ）を持たぬ身で鬼狩りとしての役割を果たしたのだ。

「すごい……」

アイズは少年の名前を聞こうとしたとき、目の前の少年が不可解な行動をとった。消えゆく際まで喚く鬼の眼前に膝をつき、何かを伝えてる様子だった。そして言葉を向けられた鬼はぴたりと喚くのをや

め消えていった。苦し気な、そしてどこか優し気表情で鬼を見送るベルの姿にアイズは見覚えがあった。
（どうして君たちは、そんな表情ができるの？）
かつて〝神楽〟と呼ばれる少年に聞いたときは要領の得ない、少なくともアイズが理解できる答えは貰えなかった。後で知ったがどうやら〝神楽〟の妹に鬼の血が混じっているようで、そのため鬼に同情しているのだと無理やり納得した覚えがある。
ならば目の前の少年は？
彼にも鬼の血が混じった大事な人がいるのだろうか。
その答えが知りたくてアイズは少年に声をかける。
「あの……「あああああああああああ！　光消えてるうううううう!!」え？」
小さいアイズの声をかき消すように少年の叫び声が響き渡る。少年は手に持った球体を確認すると慌てたように立ち上がる。
「いつの間に消えてたんだろう！　早く炭治郎さんのとこに戻らないと!!」
そう言って少年はアイズがいる通路とは別の道に向かって駆けだしていってしまった。
「あっ」
アイズは追いかけるべきかと一瞬思案したが頭を左右に振って考えを改める。これ以上、少年に干渉しようとするのはアイズの私情でしかなく、さらに言うなればアイズはミノタウロスを追っているのだ。最後の一匹がどこにいるかもわからない今、無駄な時間を過ごしている暇はな――。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!』
そう考え来た道を引き返そうとするアイズの耳に、先ほどの少年の叫び声と野太い牛怪物の雄たけびが聞こえてきた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「早く炭治郎さんのところに戻って上層に鬼が出たこと伝えなくちゃ！」
上層に鬼が出た異常事態（イレギュラー）を報告するために炭治郎のいる安全地帯に向けて走るベルだったが、その表情はどこか緩んでいた。肋骨の折れた痛みなどは感じるものの、初めて自分自身の力で鬼を倒すことができた。それまでにいくつもの葛藤があったが、それでもやり切ったとこれで自分も鬼狩りとして炭治郎達とともに戦えると。
そう、ベルは勘違いしてしまった。
途端ベルの体に寒気が弥立ち、何か嫌な予感が体を震わせた。目の前の角を曲がらなくてはいけないのに、体がそれを拒否している。あれだけの強敵（鬼）を倒してきた自分が何を恐れているのか。
ノシ、ノシ
何か巨大な生き物がこちらに歩いてくる、あの曲がり角を歩いてくる。
ベルは知らなかった。
確かにあの鬼はベルにとっては強敵であったが、ダンジョンにおける強敵ではないことを。だから勘違いしてしまったのだ。強敵に打ち勝った自分は一人前なのだと。
だからベルは思いもよらなかった。
異常事態（イレギュラー）を乗り切った自分に危機が迫っていることを。
ベルは身をもって知ることとなる。
ダンジョンの悪意とは底知れぬものだと。

「ミノ、タウロス？」

一歩一歩の足音の重さがその筋肉の塊の重さを象徴する。
全身を覆う毛並みの色は茶色く、その筋肉隆々の肉体は3？にも及ぶ。
特徴的なのは頭から生える二本の白い武骨な角。
牛の顔を持つその巨大なモンスターをベルは知っていた。エイナや炭治郎に教わったわけではない。当然だ。本来ならばこのモンス

ターは15階層、中層域と呼ばれる推奨冒険者レベル2以上の場所に存在する。こんなはるか上の階層にいていいモンスターではないのだから。

　とはいえそんなことを知る由もないベルはそのモンスターの姿をとある英雄譚に出てくる化け物と並べてみていた。その物語でとある王国の姫を攫い、そして英雄に討伐された化け物。まさしく、〝牛怪物（ミノタウロス）〟。

「な、なんでミノタウロスが!?」

　当然ベルの疑問に答えるでもなく、ミノタウロスは目のあったベルへと手に持った石斧を振り下ろす。ベルは先ほどの鬼の一撃を思い出し、受け止めるのではなく横に身を投げ出すことで回避した。もしここでベルが再び受け止めることを選択していたのならば、その体は日輪刀もろとも両断されていただろう。そして今躱せたのは奇跡に近いことをベルは肌をひりつく殺気とともに理解した。

　先ほどの鬼の大剣がフラッシュバックしたからこそ、先読みで回避できたにすぎない。

　ミノタウロスはベルが今の一撃を避けたことを不思議に思ったのか首をかしげていた。

　舐められてる。

　それだけの実力差があることを理解しながら、ベルが選んだのは逃走ではなく戦闘。

　ベルは日輪刀を構え、ミノタウロスを見据える。

（大丈夫、大丈夫だ！　さっきだって勝てたんだ……僕なら、できる!!）

　そして再び自分の闘志を燃え上がらせる。

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!』

　ベルの雄たけびとミノタウロスの咆哮が木霊する。

　ベルは再び石斧を振り下ろされたら堪らないと、まずはその腕を切り落とすことを決め技を放つ。

（水の呼吸　肆ノ型　打ち潮！）

岸を削り取る潮が如き斬撃はミノタウロスの腕へと食い込み。
「えっ？」
甲高い音とともにベルの真紅の瞳には根元から折れる日輪刀の姿があった。
ミノタウロスの肉は断ちにくい。これは冒険者たちの共通の認識であり、同レベル帯の冒険者ですら舌を巻くほどの固さを持っている。当然ベルの目の前にいるミノタウロスも例外ではない。先ほどの鬼との戦いで既に限界が来ていたのだろう。ベルの持つ技量（ステータス）では、ミノタウロスの肉を断ち切るどころか、刃を保たせることさえできなかった。
『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』
もっとも今回はそれがうまく働いた。日輪刀の支えを失ったベルが地面に転がり落ちたのと同時に、ミノタウロスは腕に刺さった異物を取り払うように腕を振り回した。もし日輪刀が折れずベルがミノタウロスの腕にぶら下がったままなら、ベルは振り回された腕によってミンチになっていただろう。
ベルは尻もちをつきながら後ずさる。自分へと向かってきた弱者が目論み通り獲物であったことに満足したのだろうミノタウロスの歩みはゆっくりしたものだった。きっとあの化け物がこちらまで来たら、あのベルの振るわれる石斧によってベルはごみ屑のように死んでしまうだろう。いや、もしかしたらあの堅そうな足の蹄に踏みつぶされてミンチになるかもしれない。どちらにしろベルが死体になることには変わりないだろう。
（あ、僕はここで終わるんだ）
冒険者になりたかった。
鬼狩りになりたかった。
ダンジョンの中で、ピンチの女の子を救って、あわよくばお近づきになりたかった。
あの日自分が救われたように、もっと多くの人を救いたかった。

子供のころから焦がれる英雄になりたかった。
けど僕にはその資格がなかったようだ。
今の僕の情けない姿を見たらどんな女の子も幻滅するだろう。

『ヴォッ？』

しかしいつまで経ってもベルに死は訪れなかった。
代わりにミノタウロスの胴体に一閃が入った。
ミノタウロスの間抜けな声。もしベルが殺され掛けていなかったら笑っていたかもしれない。
けどベルにそんな余裕は一切なかった。
今まさにベルを殺そうとしていた化け物にさらに一閃二閃、胴体だけにとどまらず鍛え上げられた肩や剛腕、下肢、厚い胸板、そして首。ミノタウロスのあらゆる場所が切り刻まれて行き、銀の光が走る。
そして次の瞬間、ベルを殺そうとしていた化け物（ミノタウロス）はただの肉塊になり果てていた。
『ヴゥ、ヴゥモオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!?』
断末魔が響き渡り、切られたことによるミノタウロスの血飛沫がベルの体を染め上げる。

「大丈夫、ですか……？」

月を見た。
否、月のように美しい人を見た。
薄暗いダンジョンの洞窟の中であっても輝きが損なわれることのない金髪。
青色の軽装に包まれた細身の体。鎧から伸びるようなしなやかな肢体は眩しいくらいに美しい。
繊細な体のパーツの中で自己主張する胸のふくらみを抑え込む、道化のエンブレム入りの銀の胸当てと手甲、サーベル。地面に向けられた剣先からは血が滴り、それは彼女がミノタウロスを肉塊に変えたこ

とを現していた。
鬼よりも恐ろしい、純粋な暴力を放つモンスターから自分を救ってくれたのは、女神と見間違えるほどの美少女だった。
「あの……大丈夫、ですか？」
際立つ月のように丸く綺麗な黄金の瞳が心配げにベルを見つめ、立ち上がらせようと手を差し出してくれていた。
大丈夫じゃないです。
全然大丈夫じゃない。
今にも飛び出てしまいそうな心臓。呼吸法どころかまともな呼吸だってしてくれない肺。染まる頬に汗ばんだ額。
英雄譚とは真逆の配役。自分はあの七年前ときと同じ側。
悔しいはずなのに、恥ずかしいはずなのに。
どうしてだろう……。

兎（ベル）の心は月（アイズ）に奪われ、盛大に恋をした。

「けっ……」
「け？」
一瞬タンポポ頭の先輩の顔が過ぎったベルは、アイズの手を両手で握り返す。
いつの間に理性という枷が霹靂一閃されていた。
「結婚してください!!」
「えっ……？」
両手から伝わる少女の動揺とともにベル視界は一回転し、闇へと沈んでいった。

六幕〝入団と恩恵〟

懐かしい夢を見た。まだベルが幼く、祖父とともに村で暮らしていた時のことだ。

祖父はベルに様々なことを教えてくれた、数多の英雄譚や物語。それに女の子のこと。

『いいかベル、男ならハーレムを目指すのじゃ。ハーレムは男のロマンじゃ!!』

『オラリオには金も、可愛い女子との出会いもなんでも埋っておる!!』

『手っ取り早く女神の眷属になるのもありだ！　あ、でもヤンデレだけは勘弁な？』

「うん！　わかったよお祖父ちゃん！」

『ベルに覚悟があるならば、わしの知り合いの老いぼれに紹介状を出そう！　鬼狩りになって、冒険者になって、夢の女子とのイチャイチャライフがお主を待っておる!!』

そう言い残して祖父は亡くなった。

ベルはその後祖父の紹介に与り、鱗滝左近寺のもとで厄介になるのだが、少し時を進ませる。

ベルが水の呼吸の修行を行っている時のことだ。兄弟子である炭治郎が友人の善逸を連れてきたことがあった。女の子の話を色々としてくれる善逸は、鱗滝や炭治郎とは違ったどちらかと言えば祖父に近い人格であり、ベルは親近感からか祖父に聞いた話を善逸にもした。そしたら善逸の様子が一変した。

それはもう。

血走った目で怒り始めた。

「おま、お前えええええ!!　言うに事欠いてハーレムうううう!?

おま、冒険者になって、鬼狩りになればハーレムが作れるだって!?

んなわけねぇだろ!!　世の中そんな甘いわけないでしょ!?　俺が禰豆子ちゃんと良い仲になるのにどんだけ苦労したと思ってるの!?

それを言うに事欠いて一夫多妻!?　お前の爺ちゃんどんなお花畑な

頭してんの!!!」
一息で叫びきった善逸を前にベルは呆然とし、反論する気にもなれなかった。そこには間違いなくわかりたくない善逸の重みを感じたからだ。
ベルが固唾を呑むと一転、善逸が落ち着きを取り戻し話を続ける。
「まぁそれはそれとして、ダンジョンで可愛い女の子と出会いたいっていうのはわかる。男なら誰でも抱く夢だよね」
「そ、そうですよね！」
「男として女の子と仲良くなりたい。女の子を助けたい。そんな気持ちで戦うのは何も間違ってない！」
「ですよね！」
「だが一つ！　ベルは知っておかないといけないことがある！」
「何ですか！」

「ダンジョンにいる女性は、強くて怖い」

「えっ!?」
「確かに、冒険者の女の子は可愛い子が多い！　けれど、あの子たちめちゃくちゃおっかないんだヨぉ！　俺が話しかけるとすごい顔するんだよぉ！　下手したら〝柱〟と同じくらい強い女の子もいるんだぜ？　そんな可愛い女の子と出会えたとしても、助けるどころか助けられるのが関の山……」
「そ、そんな……それじゃダンジョンに出会いを求めるのは――」
「落ち着けベル！　最後まで話を聞け！」
「はい！」
「確かに女の子を助けてハーレムを築くのは難しいかもしれない。だけど、もしダンジョンで女の子が俺たちを助けてくれることがあれば……」
「あれば……」
「その子は俺たちに気があるってことだ!!」
「おぉ!!」

そんな訳あるか！
そう、ツッコミを入れ、すぐさま善逸を咎めてくれる人物が傍にいてくれればどれだけよかったことか。
善逸の俺たちが下心をもって女の子を助けるなら女の子だって下心を持って俺たちを助けるはずだという謎理論が展開されていった。頼む誰かこの馬鹿を止めてくれ。
「だからこそ！　ダンジョンで出会い、この人こそって思える人が居たら押しに押せ！　大丈夫ベル、お前ならいける！（何の根拠もない）」
「わかりました善逸さん、僕頑張ります！（純粋バカ）」
こうしてベルは、祖父と善逸によってオラリオへの憧れと英才教育を施されていくわけなのだが。その結果がどうなったかは入団試験最終日になってようやくわかることだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

月を見た。
空は見えず薄暗い洞窟の中で兎は確かに月の輝きを見たのだった。
兎は月の美しさに惚れ、分不相応にも暗闇から手を伸ばそうと飛び跳ね。
「んッ！　おいアオイ！　ベントウの奴が目ぇ覚ましたぞ!!」
「うあああああああああああああああ!!」
突如として現れたイノシシに跳ね飛ばされた。
否、跳ね飛ばされたのはベルの妄想だ。実際には夢を見て起きたら目の前に猪の顔面があったのだ。
「ベントウって……ベル・クラネルさんですよ。まったくあなたは」
そこで第三者の少女の声が響いたことでベルは正気を取り戻す。
ベルはあたりを見渡し状況を確認する。ベルが今いるのはベッドの上、部屋は鱗滝の家によく似ている和室というものだろうか。体には包帯が巻かれているが痛みはない。確か入団試験でベルは鬼と戦い肋骨を数本折っていたはずだが、その痛みは無くなっていた。鬼と

戦い勝利した後、ベルは炭治郎に報告しようと戻っていた時にミノタウロスに襲われ。襲われ……。
「ほわあああああああああああ!!」
自分が気を失う寸前、高ぶった想いが暴走した結果溢れた言動を思い出したベルは顔を真っ赤にしてベッドの上で転げまわった。
さすがのベルもあの頃から成長し、善逸の言葉にも些か疑問を持っているため、初対面の女性に求婚する非常識さはわかっているつもりだった。
「こいつおかしいぞ！　頭にたんこぶ出来てるんじゃねぇのか！」
「そ、そんなはずは……！」
ベルの様子を窺っていた猪の毛皮の被り物に鍛え上げられた肉体を持つどこかベルに似た声質を持つ青年と、黒髪青眼の蝶の髪飾りで髪をツインテールにした少女が慌てたような声を上げるとベルの動きがぴたりと止まった。
ベルの行動を監視する二人が息を呑むと。
「はあああぁぁぁぁああ」
ベルはベッドの中で蹲り小さな悲鳴を上げ続けた。
これはどうしようもないとツインテールの少女は溜息を吐く。
「どうしようもないですかこれ……」
「変な奴だな！　飯でも食わせれば治るか！」
「あの……」
ようやく二人の様子に気が付いたのか、ベッドから赤い瞳を覗かせたベルが恥ずかし気に二人に尋ねる。
「皆さんは誰ですか？　あとここは……」
「俺か！　俺は嘴平伊之助、山の王だ!!」
「神崎アオイです。ここは『蝶屋敷』と呼ばれる鬼殺ファミリアの本拠地に併設された救護施設です。ベルさん、気絶する直前のことは覚えてますか？」
「ひょ、えっと、はい……多分」
それが原因でベッドの上で転げまわりましたと内心顔を赤くするベルは頷く。

「一応こちらからも状況の整合性を確かめるために確認させていただきますね」
「わかりました」
「まず、今は試験最終日の翌朝です。あなたは試験最終日、突如としてダンジョンの上層に表れた鬼と遭遇し、見事鬼を討伐することに成功。恩恵を得た冒険者を素体とした鬼をさっそく倒すなんてすごいですね」
「あ、ありがとうございます」
「俺様にだってできるぞ!!」
「はいはい、わかってますから。その後、ロキファミリアが逃がしたミノタウロスと運悪く遭遇してしまい、襲われていたところを〝剣姫〟に救われ、戦闘のダメージから気絶。ということで間違いないですか？」
「は、はい、多分間違いないです！」
「それにしても鬼とミノタウロスに入団試験で遭遇するなんてとことん運がないんですね……」
「ははっ……えっとあの、〝剣姫〟っていうのは」
「〝剣姫〟アイズ・ヴァレンシュタイン。あなたをミノタウロスから助け、あなたが鬼の討伐を行ったところを見ていたロキファミリアの第一級冒険者ですね。炭治郎さんは彼女から事情を聴き、あなたを屋敷まで連れて帰ってきたそうです」
「あの時のベル、牛野郎の血で真っ赤になってたからな！　臭いで顔顰める炭治郎に代わって俺様が風呂に投げ込んでやったんだぞ！　感謝しろ！」
「ありがとうございます伊之助さん！」
「おう！」
満足気に笑う伊之助を横目にベルの脳内で一人の少女の名前が循環する。アイズ・ヴァレンシュタイン、それがあの月のような少女の名前であり、ベルの……。
「アイズ、アイズ・ヴァレンシュタインさんかぁ……」
「ベルさんも、原因はあちらにあるとはいえ助けてもらったんです

から。あったときにきちんとお礼を言うんですよ！」
頬をだらしなく緩めるベルを叱責するようなアオイの言葉にベルは背筋を伸ばして返事をした。
そして思い出したかのようにベルは冷や汗をかく。
「そ、そういえば……」
「どうかしましたか？」
「僕気絶しちゃったみたいなんですけど、試験の結果って」
「あぁ、そのことですか」
アオイは手に持ったカルテを机に置くと、ベルに着替えを手渡した。綺麗になった羽織も一緒である。しかし服の方がベルがもともと着ていたものではない見たことのない黒い服になっていた。正確にはベルが着たことのないものか。それは背中に当たる部分には黒の服に白い文字で『滅』と書き記された詰襟であった。炭治郎や善逸が着ているものと同じ、鬼殺ファミリアの隊服と呼ばれるものだ。
「これって！」
「お館様と私たちの主神がお待ちです。詳しいことはそれに着替えてからお館様が話すそうです」
「わ、わかりました！」
慌てて隊服に着替え羽織を纏ったベルを、アオイが主神とお館様？が居る部屋へと案内する。伊之助は飽きたのか、どこかに走って行ってしまっていた。そうして屋敷の奥の部屋へと連れてこられたベルに、アオイはこの先は一人で行くようにと促しベルは一人部屋の中へと入っていく。
「失礼します」
恐る恐る襖を開け、ベルが部屋の中に入れば中には二人の人影があった。
「やぁ、よく来たねベル」
心が落ち着くとともに妙な高揚感がベルを包み込んだ。
その声はベルにとって初めて聞いたにも関わらず、まるで母がわが子を愛おしむように安らぎを与える声だった。
そんな声を発したのは、黒髪を左右に分け流し、額と紫色の瞳が

はっきり見える状態で微笑む父性の塊のような男性だった。彼が神様だろうかと呆とするベルを慈しむように男性が自己紹介をしてくれる。
「私の名前は産屋敷耀哉（うぶやしきかがや）。戦えない身ではあるけれど、この鬼殺ファミリアの団長を務めさせてもらっているよ」
「ぼ、僕の名前はベル・クラネルです！　団長ってことは、あなたがお館様……ですか？」
「……私の子供たちからは、そう呼ばれることもあるね」
なんと、神様だと思った人はファミリアの団長であり、噂のお館様と呼ばれる人物であった。炭治郎も善逸も、皆敬意を払っている様子だったが、なるほどこのカリスマ性では当然かもしれない。現にベルも既に目を輝かせて耀哉のことを見ていた。
「すまない耀哉、私のことも……」
「そうだね縁壱。ベル、私の隣にいるのが私たちの主神、継国縁壱（つぎくにより いち）だよ」
「よろしく頼むベル」
それまで耀哉の方ばかり見ていたベルは慌てて隣に座る主神に目をやる。長い黒髪を頭後で括り、炭治郎のように額には痣がある。耀哉とは別の物静かさがある男神だった。真っ赤な着物も相まってかベルが抱いた情景は真っ赤な日だった。
はっと正気を取り戻したベルは慌てて頭を下げる。
「よ、よろしくお願いします神様！」
縁壱はベルに静かに微笑みかけてくれた。
「それで、入団試験の結果だけれど」
「はい」
「おめでとうベル、新しい子供たちが増えて嬉しいよ」
耀哉の言葉にベルは安堵の息を吐く。隊服を渡された時点でわかってはいたが、言葉にされるとされないでは大きく変わってくる。
「ありがとうございます！　ファミリアの皆さんのように精一杯頑張ります！」
「元気があるのはいいことだね。それじゃ縁壱、ベルに神の恩恵（ファルナ）を

お願いできるかな」
「あぁ、ベル。服を脱いで背中をこっちに」
「わかりました！」
ベルは上半身の服を脱ぎ背中を露わにすると、畳の上に敷かれた布の上にうつ伏せになった。縁壱はそんなベルの背中に一滴の自身の血を指先から垂らすと、淡い光とともにベルの背中に神聖文字が刻まれていく。縁壱はベルの背中に刻み込まれたステイタスを紙に写し取るとベルに服を着ていいという。
「お疲れ様ベル、これで君も正式な私たちの家族（ファミリア）だよ」
「はい！　あ、それでステイタスは見せてもらえないんですか？」
写し終えた紙をさっさと仕舞ってしまった縁壱にベルは尋ねるが、縁壱は首をかしげてしまう。何かおかしなことを言ったかと焦るベルに耀哉のフォローが入る。
「私たちのファミリアにはね、ステイタスの更新はしても確認をする人はあまりいないから縁壱もいつもの癖で仕舞ってしまったのだろう」
「ええ!?　皆さん確認しないんですか！」
「皆が皆そうというわけではないけれど、ここでは呼吸法を使っている分、柱の皆は数値じゃなくて体の動かし具合で強くなったかを確かめる子が多くてね」
「で、でもスキルとか魔法もステイタスを確認しなくちゃいけないんじゃ」
ベルのその言葉に耀哉は苦笑いを浮かべる。
「残念だけど、呼吸は恩恵と相性が悪いのか、呼吸を扱う剣士の子供たちには魔法もスキルも顕在することが滅多になくてね」
「そうなんですか……」
魔法というものにひどく憧れていたベルは耀哉のその言葉に愕然としてしまう。そんなベルの様子を哀れに思ったのか、縁壱はベルのステイタスの写しをしまった引き出しを開け紙を取り出す。
「見たいなら見せるが」
「い、いえ！　どうせ神の恩恵（ファルナ）を貰ったばかりだとアビリティは

オールゼロって聞いてますし……またの機会に見せていただきます」
「そうか……」
唐突に告げられた真実に肩を落としてしまったベルは慌てて遠慮する。見ても変わらない現実に縋る元気は既になかったからだ。
「それじゃベル、自室への案内は部屋の外で待機している隠の子がしてくれるから戻っていいよ」
「わかりました。神様、お館様、失礼します」
そう言い残してベルは部屋から去っていった。
ベルを見送った耀哉は縁壱へと笑いかける。
「随分と元気のよさそうな子が入ってきたね」
「あぁ、そうだな」
「それはベルのステイタスかい？　……おや」
ベルが去って行ってからも紙に目を落とす縁壱の様子が気になった耀哉は後ろからステイタスをのぞき見すると笑みを浮かべる。
そこに並んでいたのはアビリティオールゼロの数字と何も書かれていない魔法のスロット。
そして一つのスキルであった。
「スキルが書かれているね」
「……書かれていたな」
「縁壱、いつもの癖でよく見ずに仕舞ったね」
「……」
とはいえ耀哉は思う。神の言葉で言うならば結果オーライというやつだと。
このスキルはベルに伝えないからこそ意味のあるものだ。

ベル・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
器用：Ｉ０
敏捷：Ｉ０

魔力…10

《魔法》

《スキル》

【月兎一途(リートゥー・フレーゼ)】

・早熟する

・懸想(おもい)が続く限り効果持続

・懸想(おもい)の丈により効果向上

「憧憬(想い)というものは強くなるための原動力であれ、決して道具にしてはいけないからね」

七幕〝豊穣の女主人〟

オラリオ三大巨頭の一角であるロキファミリアの本拠地〝黄昏の館〟。

いくつもの塔が集合した造りはまさに小さな城と呼べる大きさだ。

そんな館の中庭、日差しが心地よく照らすベンチの上。そこで一人の少女が自身の大好物であるじゃが丸くんを手にしながらも上の空になっていた。ちなみにじゃが丸くんとはジャガイモを揚げたコロッケのようなものであり、少女のお気に入りはそのじゃが丸くんにたっぷりの小豆とクリームが乗った小豆クリーム味なのだ。そんな好物を前に一切食べる様子のない少女に保護者であるエルフは通りすがりざまに目を見開いたという。

そんなじゃが丸くん大好き少女の名前はアイズ・ヴァレンシュタイン。ロキファミリアの第一級冒険者にして〝剣姫〟の二つ名を神々から与えられた美少女である。とはいえ可愛らしい黄金の瞳はなぜか空を泳ぐ雲が如く揺らいでいた。

自分でも原因には心当たりがある。

昨日、遠征の帰りにあったミノタウロス上層逃亡事件から助けた少年。あの鬼殺ファミリアの入団試験を受けていたようで、まだ神の恩恵も持たない状態でダンジョンの六階層を生き延び、数年ぶりに上層で目撃された鬼までも討伐したあの白髪赤目の兎のような少年のことが忘れられないのだ。

『結婚してください!!』

あんなことを言われたのは初めてだった。

ダンジョンでミノタウロスに殺されかけたところを助けた自分に対して、感謝を述べるのでも、恐怖するのでもなく、求婚してくる相手が居ようとは誰が思おうか。一瞬タンポポのような金髪頭の少年が浮かんだ気がしたが、じゃが丸くんが揚げられるときの油のはねる音にも満たない時間で小さなアイズが叩き切った。少年をあれと重

ねるのは失礼であると本能が感じたのだろうか。
アイズも女神にも劣らぬ美しさを持つと言われる美少女である。これまで茶や食事の誘いなどを受けたことは多くあるが、大抵はアイズがその遠回しの意図（好意）に気が付けないか、アイズ崇拝者たちによって潰されていた。なのでまさか初めて会ったその瞬間に付き合うを飛び越して結婚を求められるなど寝耳に水であった。真正面からぶつけられた純粋な好意と告白に小さなアイズは顔を真っ赤にして大慌て、アイズも動揺から握られた手越しに少年を一回転。投げ飛ばしてしまったのだ。もともとのダメージを相まってか少年はぽっくり気絶してしまい、その真意を探るどころではなくなってしまった。
さらにタイミングが良いのか悪いのか、直後に表れた炭治郎がアイズから事情を聞くと直角に頭を下げ礼を言いさっさと少年を連れて行ってしまったのだ。もちろんアイズ自身も少年から求婚されたことを炭治郎には話せていないためあれなのだが。加えて離れたところで様子を窺っていたベートから一連の出来事を笑われたこともアイズを不機嫌にさせる要因であった。
「確か、ベル……？」
炭治郎が少年を呼んでいた名前をアイズは口に出す。
かの少年に聞きたいことが山ほどあったため、その悩みからアイズの食欲はなくせっかく買ったじゃが丸くんも日光浴をするだけで時間が過ぎていく。
「ア、アイズさん！」
一刻ほどそのようにして過ごしているとさすがに心配になったのか同じロキファミリアの団員であるエルフの少女が声を上げた。山吹色のポニーテールを揺らすちょっとそっちの気があるエルフの少女の名前はレフィーヤ・ウィリディス。アイズに憧れる魔導士であり、様子のおかしいアイズを心配に思いやってきたのだ。
「レフィーヤ……」
「なんだか様子がおかしかったので、その……何かあったんですか？」
アイズは思案する。他の団員比べ、レフィーヤは一般的な常識を持

つ少女であり、アイズの悩みも解決してくれるのではないかと。
「結婚」
「はい？」
「レフィーヤは結婚してってお願いされたらどうする？」
アイズは感じ取れなかったが、もしここに他の団員が居れば空気の凍った音が聞こえたことだろう。心配そうにアイズを見つめていた青色の瞳が見開かれたまま動かない。電源が落ちたように動かなくなったレフィーヤの目の前でアイズは手を振るが反応はない。
「レフィーヤ？」
「けけけけけけ結婚って！　あの結婚ですか!?　Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕのあの結婚!?　君の瞳に乾杯的な!?　君とならどこまでも行けるさ、さぁハネムーンへ!?」
「う、うん。よくわからないけど、多分そう」
「ななななんでアイズさんがそんなことを!?」
「えっと……」
山が噴火したかの如くうろたえ出したレフィーヤの姿にアイズはこのまま相談してもいいものかと眉を顰める。
あれやこれやと一人妄想に耽るエルフの少女は何やら確信めいた表情でアイズに詰め寄る。
「アイズさん、まさか誰かに告白されたんですか？」
「ギクッ」
「誰ですか？」
「レ、レフィーヤ？」
瞳から光をなくしたレフィーヤはアイズの肩を掴み、アイズの瞳に深淵を映り込ませる。
「ア、アイズさんに結婚を申し込むなんて。そんな身の程知らずな、ハレンチ野郎いったい誰ですか？」
「落ち着いて」
「うちのファミリアですか？　ベートさんですか？　あの駄狼ですか？　それともまた別の……まさか別派閥の人間なんて言わないですよね!?」

「うっ……」
「そうなんですか!?」
「し、知らない」
「アイズさん!!」
我が偶像の純潔の危機と言わんばかり捲し立てるレフィーヤに圧倒されるアイズは相談したのが間違いだったかもしれないと汗を垂らしながら目を逸らす。しかし顔を真っ赤にしたエルフの追及はやまず、あれこれ自身の妄想も踏まえレフィーヤの中で勝手な物語が築かれていっていた。
「アイズさんいけません！　そんなどことも知れない男の誘いに乗ってしまったら最後アイズさんのじゅんけっ――ぐへっ」
「お前たちは昼間から何を騒いでいるんだ！」
レフィーヤの妄想が限界を超え吹き出そうとしたそれを止めるようにレフィーヤの頭上からゲンコツが振り下ろされる。
「いたたたたっ」
「あ、リヴェリア」
「えっ、リヴェリア様!?」
レフィーヤの背後に立っていたのはロキファミリアの副団長であるリヴェリア・リヨス・アールヴであった。ハイエルフと呼ばれる王族の証である深緑の髪を靡かせながらその双眼には呆れが宿っていた。
「まったく、中庭で騒ぎが起こっていると聞き来てみれば、何を騒いでいるんだレフィーヤ」
「そ、それは、だって、アイズさんが……結婚ほにゃほにゃ」
「……はぁ、お前はいったん下がれ」
「ええ！　そんな！」
「今朝出した課題、まだ終わっていないだろう」
「それは……うぅ、はい」
肩を落としながらその場から去っていくレフィーヤの姿にアイズは安堵する。
「アイズ、お前もだ」

「リヴェリア……」
「お前が戦い以外に興味を持つことは喜ばしいが周囲に心配を掛けさせるな」
「ごめんなさい」
「わかってくれるならいい。そ、それでだ、先ほど結婚がどうのと聞こえたが」
「あ、私ティオナ達と買い物行く約束があった」
「お、おい待てアイズ！　お前普段はそんな買い物に積極的ではないだろ」
「イソガナイト」
「アイズ！」
同年代との恋バナであればアイズも多少口を軽くするが、リヴェリア（皆のママ）と恋バナをするにはアイズとて気恥しさとともに気まずさも覚えるというもの。アイズはティオナ達との約束を盾にその場から退散するのであった。
もっともアイズの隠し事は今夜とある場所で酒のつまみとして周囲に暴露されるのだが。場所の名前は〝豊穣の女主人〟。ロキファミリアが遠征の打ち上げを行う酒場であった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「〝豊穣の女主人〟ですか？」
「あぁ、ベルも無事入団できたからね。さすがにファミリア総出ってわけにはいかないけど、俺とベルあと二人でささやかな歓迎会をしようと思ってさ」
「ありがとうございます！」
本当はまだ見ぬ鬼殺ファミリアの団員に挨拶をしたかったベルだったが、任務や私情により大多数の団員がオラリオにいない鬼殺ファミリアの事情を鑑みればむしろ歓迎会を開いてくれるだけ涙ものであった。そんな訳もあり、ベルと炭治郎は〝豊穣の女主人〟があるオラリオの西地区に向かって歩いている。随分と長いこと気絶し

ていたらしく、ベルが縁壱から神の恩恵（ファルナ）を刻まれたときには既に夕暮れであり、部屋へと案内されたベルを先に待っていた炭治郎が連れ出したのだ。
「そ、そう言えば炭治郎さん」
「どうしたんだ？」
「アイズ・ヴァレンシュタインさんってどんな人なんですか？」
ベルは道すがら早速自分の意中の相手である少女のことを炭治郎に尋ねた。さらにベルがアイズに告白してしまったことを知っているのかどうかの探りも含めている。
「ヴァレンシュタインさんかぁ。ロキファミリアの第一級冒険者って言うのは知ってる？」
「はい、神崎さんから聞きました。なのでこう、好きなものだったり、趣味だったりを知っていたら……」
「と言っても、別のファミリアの人だし俺もそこまで詳しいわけじゃ――ん？」
顔を真っ赤にしてアイズのことを知ろうとするベルのニオイを炭治郎の鼻が敏感に捉えた。それはまるで恋の文字を冠する柱の女性が恋仲である蛇の文字を持つ青年へと向けるニオイと同じ、恋慕のニオイであった。
「もしかしてベルはヴァレンシュタインさんのことが好きなのか？」
「へぁ!?　なななんでそれをッ！　ヴァレンシュタインさんから何か聞いたんですか!?」
「そ、そういうわけではないけど。なんだか幸せそうなニオイがしてたから」
「あ、あぁ！　なるほど!!」
直球に聞いてくる炭治郎に一瞬、アイズに告白したことを知っているのではないかと慌てふためたベルだったが、炭治郎の特技を思い出し納得する。とはいえ自分の思慕の念を知られてしまったため顔をトマトのように染め上げてしまっているのだが。
「その、はい……一目見て好きになっちゃって」

「一目惚れかぁ。ベルらしいな」
「そうですか……？」
「むむ、兄弟子として協力したいのは山々だけど、ヴァレンシュタインさんか……」
「やっぱり無理ですかね？」
目をつぶり眉を顰める炭治郎に不安げな表情を向けるベル。
「他のファミリアとの恋愛はあまり推奨されてないって言うのがオラリオの暗黙の了解なんだ。だから相手がロキファミリアとなると」
「うっ」
「それにヴァレンシュタインさんは……」
「？」
「いや、なんでもないよ」
意味ありげに暗い表情をした炭治郎へ首をかしげるが、すぐに元の笑顔に戻ってはぐらかされてしまう。
「そう言えば善逸さんから聞いたんですけど、炭治郎さんは恋仲の方がいるって」
「あぁ！　カナヲのことだね。恋仲というより結婚してるんだ」
「け、結婚ぉぉぉぉ!?」
「今度ベルにも紹介するね」
「結婚……結婚」
突如としてカミングアウトされた兄弟子の人夫発言に衝撃を受けたベルは、昨日の自分の発言も相まってショート寸前となる。
「あの炭治郎さん、夫婦生活ってど、どんな感じですか？」
「……お、到着したぞベル！」
何やら間延びした感覚があったが、目的地に到着したようでこの話は一旦打ち止めとなった。
案内されたのは木造であり、多くの人で賑わっている綺麗な酒場であった。客のほとんどが冒険者らしい格好をしており、ダンジョン帰りなのか浴びるように酒を飲むものが多くいる。ウェイトレスは全員女性であり、それもかわいい女の子ばかりだった。豊穣の名にふさわしい緑色の制服に白色のエプロンを全員が身に纏っており、ベル一

人であれば来るのに気後れしてしまっていただろう。
「あ、炭治郎さんこんばんは！」
「シルさんこんばんは」
ベルの前を歩く炭治郎に従業員の一人が挨拶してくれる。薄鈍色の髪を後ろで括った可愛らしい少女だった。シルと呼ばれた少女は炭治郎の後ろにいるベルとその羽織を見て笑みを浮かべる。
「そっちの人が新人さんですか？　初めましてシル・フローヴァです！」
「べ、ベル・クラネルです。よろしくお願いします」
「はい！　私のことはシルと呼んでください！　ミア母さん～二名様入りま～す！」
「あ、シルさん、俺はこれから他の人たちを呼んでこないといけないからベルだけ先に通してもらってもいいですか？　追加は二名の予定です」
「炭治郎さん!?」
「わかりました！　それでは四名様席を開けておきますね！　ささベルさん先にカウンターで炭治郎さんが来るのを持っていましょう！」
「え、ちょっとッ」
「それじゃベル、すぐに戻ってくるから」
「炭治郎さ～～～ん！」
シルに腕を掴まれたベルは一人酒場の中へと連れていかれ、先にカウンター席に通されたベルは慣れない空気に落ち着かない様子を見せていた。気を紛らわせるためにメニュー表へ目を向けたベルは目を点にする。
「た、高い……」
料理の内容よりも先にその値段に目が吸い込まれた。一般的な食事は一食５０ヴァリスほどで食べられる。冒険者としては装備品や消耗品もろもろへの出費も激しいため、食事への優先度合いはそこまで高くない。にも拘わらずこの酒場ではシンプルなパスタであっても３００ヴァリス。通常の六倍という値段にベルは圧倒される。周

りは冒険者が多く人気店であることは一目瞭然だが、これほどの値段とは予想外だった。
「あんたが炭治郎が連れてきたっていう新人かい？」
カウンターから乗り出してきたドワーフの女将さんが目の前に醸造酒（エール）の入ったコップをカウンターに叩きつけてきた。
まだ注文していないのだが……。
「あのファミリアの新人ならとんだ大食漢なんだろ？　じゃんじゃんファミリアで金を使って行ってくれよぉ！」
「ええ!?」
ばっと背後を振り返るとシルが目を逸らしたまま口笛を吹いていた。
「じ、実際に鬼殺ファミリアの方は大食いの方も多いですし、嘘は言ってませんしぃ」
「なら僕の目を見ていってくださいよ！」
「えへへ」
「えへへ、じゃねー！」
「まぁまぁ料理の注文は炭治郎さんたちが来たらまとめてしてくれるはずなので、今はお酒でも飲んで、あとおつまみに、お通しと」
「ちょ、ちょっと待って！　さすがに先輩が来る前に先に呑んでるのは……」
「なんだいあんた、何も飲み食いせずに酒場に居座る気なのかい！」
「いえ滅相もありません！」
再び叩きつけられる醸造酒。ベルの目の前には二つのコップが無言の圧を放ちながら並んでいた。ベルはあらゆる圧に負け、ちょびちょびと醸造酒に口を付けた。
その後勝手におつまみを持ってきたシルがベルに出されたはずのもう一杯の醸造酒を口にしながら隣で休憩を始めたため、二人でしばらく雑談する時間が続いた。
ともすれば時間が経つのは早いもので、ベルは酔いこそ回ってはいないが体が温まってきた。炭治郎達がまだ来ていないのにいいのだろうかと思いつつ、予想より炭治郎が来るのが遅いことに冷や汗をか

き始めた。このまま炭治郎が来なければ、手持ちの少ないベルは無銭飲食になってしまう。
せっかく温まった体が冷えていくのを感じながらベルは顔を青くし始める。
「どうしたんですかベルさん？」
隣で楽しそうに酒を口にするシルの可愛らしい笑顔も、ベルを奈落へと突き落とす魔女の微笑みに見えてしまう。
「あ、いえ、その、炭治郎さんたち遅いなぁって」
「あぁ、そう言えば確かに遅いですね。どこかでトラブルに巻き込まれたのでしょうか？」
縁起でもないことを言わないでほしいとベルが苦笑いで返すと、酒場の扉が開かれる音が聞こえた。炭治郎が来たかとベルがそちらへと視線を向ければ、生憎そこにいたのは炭治郎ではなかった。
「ミア母ちゃんきたでー！」
代わりにベルが求める出会いがあった。
あらかじめ予約していたのか空白地帯だった席に十数人規模の、さまざまな種族で構成された冒険者の一団がやってきた。どの冒険者も生半可ではない実力を漂わせる集団。心臓が飛び出そうになるベルの視線の先。
触れれば壊れてしまうのではないかと不安になるほど精緻な造りをした人形のような美しい少女。その黄金の瞳だけでご飯が何杯でも食べれてしまいそうになる。月明りにも劣らない落ち着いた輝きを持つ金髪は神からの賜りものか。彼女は女神か精霊か……。
炭治郎の代わりにやってきたのは、ロキファミリア（アイズ・ヴァレンシュタイン）の一団だった。

八幕〝弱者の拳〟

「よっしゃあ、ダンジョン遠征みんなご苦労さん！　今日は宴や！　飲めぇ!!」
「「「乾杯～!!」」」
立ち上がったロキの音頭と共に一斉にジョッキがぶつかり合う音が響く。団員たちが盛り上がるのを横目に、アイズもティオナたちに引っ張られて軽い乾杯をした。
ここは『豊饒の女主人』。オラリオの西メインストリートの中でも最も大きな酒場であり、主神ロキのお気に入りの店だ。そのため、今日のロキファミリアの打ち上げにも選ばれていた。お気に入りの理由は、ウェイトレスの制服を見ればわかるだろう。さすが我らの主神様だと、団員一同呆れたものだ。もっともそれに便乗して楽しんでいる団員もいるわけなのだが。
それはそうとして、アイズもここの料理は好きだ。
諸事情に他の団員のように果実酒を煽りながら、味気の濃い料理を頬張ることができないのが寂しいところだが、冷たいハニーミルクをお供に自分のペースで料理を楽しむのも悪くないと、大皿の鳥の香草焼きを口にする。とはいえ、ここ数日まともな食事をしていなかったのだ。久しぶりの豪華な食事にどうしても手はゆっくりとなってしまう。
そんなアイズを横目に反対に食事を頬張るティオナが気分がよさそうに話しかけてくる。
「いやぁ、それにしても遠征があの芋虫たちのせいでおじゃんになったときはどうしたものかと思ったけど、結局帰ってきたらこうやってバカ騒ぎできてるんだしなんとかなるもんだね！」
「うん……誰も死ななくてよかった」
今回のロキファミリアの遠征は未到達領域であるダンジョンの５９階層を目標としたものであったが、５０階層を超えた際に出現した

新種のモンスターにより撤退を余儀なくされたのだ。全身の体液が溶解液となっていたその芋虫型のモンスターは、物理攻撃を行った際にこちらの武器ごと巻き込み溶解させて行くためアイズの持つ不壊属性の武器や魔法による手段でしか対処できず今回は敗走したともいえる。

それだけの戦いがあったにも関わらず、昨夜主神であるロキにステイタスの更新をしてもらった結果は散々であった。アビリティの総合上昇値はたったの１６。未到達領域には行けなかったとはいえ深層である５１階層まで到達してこれだ。アイズはレベル５になって早三年、限界という見えない壁がアイズに焦燥感を与えていた。さらに今回の遠征で消耗した武器の修理に掛かったお金など、アイズの気持ちを重たくする要因が積み重なっていた。

とはいえ悪いことばかりではなかった。

６階層で出会った白髪の少年。恐らく、新しく鬼殺ファミリアに入るだろう人。ロキファミリアが逃がしてしまったミノタウロスを追いかけている際に巻き込んでしまった白兎。名前は確か、ベル・クラネル。

出会ったその場で求婚されたのはいくらアイズでも初めての経験だった。少なくとも嫌悪はなかった。あったのは多分困惑。それから興味。好意や結婚は別としてベルのことを知りたかった。巻き込んでしまったことも謝りたかった。

彼との出会いは少しの刻でも、アイズに戦いを忘れさせてくれた。きっと掛け替えのない出会いになるはず。

「アイズさんが結婚アイズさんが結婚どこの馬の骨とも知れない輩から求婚どこの誰ですかアイズさんがアイズさんがアイズさんが結婚結婚結婚結婚……結婚結婚」

「ねぇ、アイズ。昼間からレフィーヤの目が定まってないんだけど何かあったのかしら……？」

「し、知らない」

す、少なくともアイズにとっては。

「それにしても意外だったよねぇ。アイズがあたしたちを買い物に

誘うなんて」
「元もと今回の戦利品の売買があったからいいけど、何かあったのかしら？」
「うん、ちょっとね」
ティオネとティオナから昼間積極的に買い物に行こうとしていたアイズの珍行動に興味津々なのか、二人でアイズを挟むように席を近寄らせてきた。アイズは曖昧な表情でお茶を濁せば二人はそれ以上は追及してこなかった。
「それでティオネ、さっきまでフィンを酔い潰させる勢いでお酌してたのに『ガンッ』なんで……」
「それが聞いてよ！　ロキが変な賭け事始めて団長それに乗っちゃったの！」
「あー、さっきから騒がしいのはそれかぁ」
「珍しいね……どんな賭け事だったの？」
「……」
「ティオネ？」
「……リヴェリアのおっぱいよ」
「ぶはっ、ティオネってばリヴェリアのおっぱいに負けたんだ！」
「ああん!?　ちょっとあんた表に出なさい！　ぶっ飛ばしてやる！」
腹を抱えて笑い出すティオナに激昂するティオネ。そもそもフィンがそこまで思考能力を失ったのはティオネが飲ませすぎたのが原因なのではと思ったが口には出さなかった。アイズは賢いのだ。
そんな騒がしくも楽しいロキファミリアの時間は過ぎていく。途中アイズが下戸やら暴れ上戸だの好きかって言われたがそこは割愛しよう。
料理も酒をあっという間に消えていき、ウェイトレスが慌ただしく行ったり来たりする中、団員達も口も酒に緩くなったと感じられる時だった。
「そうだアイズ！　お前のあの話を聞かせてやれよ！」
大テーブルのアイズの斜め向かい、見るからに悪酔いしているとわ

かるほど顔を赤くしたベートが新たな話題をアイズに催促してきた。あの話とはどの話だろうと小首をかしげるアイズにベートは酒を呷りながら上機嫌に話し出す。

「あれだって、帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！　最後の一匹、お前が6階層で始末しただろ？　そんで、ほれ、あん時いたトマト野郎の！」

――ベートが何を言わんとしているのか、理解した。

自分が助けた、白髪の少年（ベル）のことだ。

「ミノタウロスって、17階層で襲い掛かってきて返り討ちにしたら、すぐに集団で逃げだしていった？」

「それそれ！」

ティオネの確認に上機嫌にベートはジョッキを呷る。酔いからか口がよく回っているベートにアイズは嫌な予感を覚える。気が付けばロキファミリアは幹部を中心にベートの話に耳を傾けており、ロキも興味津々といった様子だ。

「それでよ、いたんだよ。ひょろくせぇ鬼狩りの冒険者（ガキ）が！」

――止めて、と。

それ以上続けないで、とアイズは反射的に心の中で叫んだ。

「抱腹もんだったぜ、持ってた武器はミノの野郎に折られちまってよぉ！　可哀そうなくらい震え上がっちまって、顔を引きつられてやんの！」

「鬼狩りじゃと？　羽織を着たあそこの団員が今更ミノタウロス相手に苦戦するとは思えんが」

「いや待て、まさか」

「十中八九、またあのバカみてぇな入団試験でもやってたんだろうよ！　そんでミノタウロスに殺されてちゃざまぁねぇけどな！」

幹部であるドワーフのガレスとエルフのリヴェリアの問いかけにベートはダンジョン内で逃げてきた冒険者の話をする。鬼殺ファミリアの入団試験を知っている者たちは若干眉を顰める。

「あの、鬼殺ファミリアの入団試験って……？」

先ほどまで幽鬼のごとく亡霊と化していたレフィーヤであったが、

我に返ったのか入団試験を知らぬ団員達代表でリヴェリアに尋ねた。リヴェリアもどう言ったものかと間をおいてから重い口を開いた。
「恩恵を受けていない状態でダンジョンの6階層で五日間生き延びるというものだ」
「「はぁ!?」」
「な、なんですかそれ！　そんなの非常識すぎます!!」
知らなかった者たちに動揺が走る。元々鬼殺ファミリアはおかしな連中が多いと思っていたがこれほどとは。
「実際にギルドが特例を出しているのだ。。我らが他ファミリアのことをとやかく言うべきではない」
そうは言うもののリヴェリアの顔は苦々しい。
「まぁまぁ縁壱とこはおいとこや！　それでベート、その冒険者は助かったん？」
妙な空気になりつつあることを感じたロキは鬼殺ファミリア自体の話題から逸らすように、ベートに続きを促した。ベートも自分のとっておきが別方向に進みそうになっているのを苛立たしく感じていたのか、そのロキに乗っかる形で口を大きく開く。
「当然だろ、アイズが間一髪のところでミノを細切れにしてやったんだよ、なっ？」
今自分がどのような顔をしているのか、アイズにはわからなかった。
絶え間なくいくつもの波紋が広がる心の中で自分がどうすればいいのか、何を感じているのかさえ分からなかった。
ミノタウロスの血を浴び、真っ赤に染まったベルのことを笑うベートたちに、その様子を想像して引いたように苦笑いを浮かべるティオナ。悲しくなったのはわかった。
「アイズ、あれ狙ったんだろ？　そうだよな？　頼むからそう言ってくれ……！」
「……そんなことないです」
嘲笑するベートにアイズは絞り出すようにしてそれだけこぼす。
「それにだぜ？　そのトマト野郎、助けられた途端いきなりアイズ

に結婚してくれだの言ってきやがって……ぷくっ、アイズにその場で振られてやんの!!　うちのお姫様、助けた相手をその場で気絶させてんよ!!!」

「……くっ」

「アハハッハハッ！　そりゃ傑作やぁ！　縁壱んとこの子供ざまぁ!!　何うちのアイズたんに告ってんねん!!」

「ふっ、ふふ……ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない……！」

どっと周囲が笑いに包まれる。レフィーヤが、ロキが、ティオネが、ロキファミリアだけでなく聞き耳を立てていたほかの客までもがこらえ切れずに笑い声をあげた。

自分の周りだけ大きな穴が開いた感覚。アイズ一人だけが呼吸のできない暗い深海に落とされたような。

笑いながらアイズの表情を和らげようとしてくるティオナに聞きたかった。今自分はどんな目をしているのか。

「しかしまぁ、久々にあんな情けねぇ奴を目にしちまって、胸糞が悪くなったぜ。普通無様な姿晒して助けてもらった相手に求愛するか？　俺ならそんな情けねぇことできねぇな！　ドン引きだぜ、なぁアイズ？」

卓の下で足に置かれている手がいつの間にか固い拳になっていた。ふと視線を上げれば、この場で唯一不快感を表しているだろうリヴェリアと目が合った。それだけでも少しだけ手の力が緩んだ。

笑う周囲に気を大きくするベートは休む間もなくベルへの嘲笑を口にする。やがて我慢の限界となったリヴェリアと口論を始めていた。リヴェリアの叱責に多数のエルフや団員が気まずそうにするがベートは止まる様子がない。むしろ酒を飲んで思考能力が低下しているのに加えて、逆にリヴェリアへの反骨精神で再びアイズへ視線を投げかける。

「アイズはどう思うよ？　自分の目の前で震え上がっていたくせに、みっともなく尻尾振ってくる野郎を。呆れてものも言えねぇってか？　だから言葉じゃなくて、投げ飛ばしてトマト野郎を振ったんだ

ろ？」
「……別に振ったわけじゃありません。それに、ベルは情けない冒険者じゃない……と、思います」
確かにベルはミノタウロスに殺されかかっていたが、一人で上層に出た鬼を倒した直後であったし、何よりあのミノタウロスを相手に戦うとしていたのだ。ミノタウロスに殺されかけていた姿しか見ていないベートと違い、アイズにはベルが情けない冒険者とは思えなかった。
「ああん？　なんだそのどっちつかずの答えは……じゃあ質問を変えるぜ？　あのガキと俺、ツガイにするならどっちがいい？」
その強引な問いかけに、それまで泥酔しかけていた団長であるフィンが驚くように酔いからさめる。
「ベート、君、酔いすぎじゃない？」
「うるせぇ。ほら、アイズ、選べよ。雌のお前はどっちの雄に尻尾振って、どっちの雄に滅茶苦茶にされてぇんだ？」
この時ばかりは、アイズは明確にベートへの嫌悪を覚えた。迷いなく目の前の青年ではなくベルを選ぶ。小さなアイズもそれに賛同するようにベートに対してあっかんべーの動作をしていた。
「私は、そんなことを言うベートさんとだけは、ごめんです」
「無様だな」
「黙れババァ!!　……アイズ、お前さっき振ったわけじゃねぇって言ってたがよ、ならあのガキの求婚を受け入れるってのか？」
高ぶっていた感情に冷や水を浴びせられる。
心の中を埋め尽くすのは否と不の文字たちばかり。
あの少年が嫌というわけではない。だが受け入れられるかどうかは別の話である。アイズには何が何でも叶えなければならない願望があり、そのためにベルを振り返ることはできなかった。
「はっ、そんなはずねぇよな。自分より弱くて、軟弱で、救えない、気持ちだけが空回りしてるだけの雑魚野郎にお前の隣に立つ資格なんてありはしねぇ。他ならない、お前がそれを認めねぇ！　なにより――！」

そして彼は、それを言った。

「鬼狩りなんて臆病者ども、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねぇ!!」

「取り消せぇ!!」

「あん?」

直後。

一つの影が、店の隅から立ち上がった。

「べ、ベルさん!?」

店員の少女の制止を振り払いながら一人の少年がロキファミリアの、ベートの目の前までやってくる。

アイズは言葉を失い、体温が抜け落ちていくのを感じた。なぜならそこにいたのは今一番この場にいてほしくなく、今の話を一番聞かれたくない相手だったからだ。

「ベル……」

ベル・クラネル。初雪のような羽織と髪の少年、彼がそこにいた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

少年は振って降りた幸運に舞い上がっていた。

それが偶然だろうが必然でも、あるいは運命でも何でもよかった。

こんなに早く自分の想い人であるアイズを目にできるとは思って

もみなかったから。
ふと耳を傾ければあの鈴を転がしたような声が聞こえる。
ロキファミリア総出で現れたことには驚いたが、どこかでアイズに声がかけられたら昨日のことを謝ろうとのんきにもベルはそんなことを考えていた。
炭治郎はああ言っていたが、もしできるならこの機会にお近づきに……。
などとどれほど自分は能天気だったのだろう。
『それでよ、いたんだよ。ひょろくせぇ鬼狩りの冒険者(ガキ)が！』
心臓を矢で射抜かれた気分だった。
冒険者の笑い声と、自分の情けなさを吹聴する狼人の青年。
後ろ姿しか見えないあの人は今どんな顔をしているのかわからない。
体の芯が冷えていくのを感じる。
だが客観的に話を聞いてみればわかることだ。
自分がいかに情けない存在であったかを。
自分が憧れていた立場が逆転した挙句、助けてくれた可愛い女の子にその場で求婚。そりゃ笑われもする。
自分が憧れていた英雄とは正反対なのだから。もしここから自分がアイズに付きまといだしたらそれこそ、英雄(主人公)に折檻される悪役の出来上がりだろう。
情けない。
否定などできるわけがなかった。
いつか、あの人に言われた言葉を思い出した。
『弱者には何の権利も希望も与えられない！』
全くその通りだ。
弱いままの自分が何かを求めても、強い何かに奪われてしまう。
それが現実だと教えられただろう。
強くならなくちゃいけない。
なぜ忘れていたのだろう。
強くなろう。

もう誰にも笑われないように。
強くなろう。
もうあの人に庇われなくてもいいように。
強くなろう。
誇れる自分になって彼女の隣に立てるように。
強くなろう、明日から。ただ今日はもう――。
『鬼狩りなんて臆病者ども、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねぇ!!』

「取り消せぇ!!」

強くなって、からじゃないだろうッ!!!
「ベ、ベルさん!?」
後ろからベルを止めるシルの声が聞こえるがベルは立ち上がり、目の前に立つベルを訝しむベートの前へと歩を進めた。
アイズの方を一瞥しようかとも考えたが、今するべきことでもその権利もないとベルは真っすぐベートだけを見た。
「今の言葉、取り消してください」
「誰だよてめぇ……ってもしかして昨日のトマト野郎か!?」
ぎょっとした表情で店中の視線がベルへと集められる。その後の模様は大きく二つに分かれていた。面白そうに興味深げにベルを見る視線と、酒の肴として笑ってしまった本人がいることへの気まずさから目を逸らす視線。幹部陣は主に後者であった。なおもちろんベートはそんな気まずさを覚えるはずもなく。
「なんだよ、馬鹿にされて怒って出てきたのか！　おいおい、事実を言ったまでだろ？　雑魚が出しゃばんじゃねぇよ」
確かに自分のことを馬鹿にされ悔しかったのも事実だが、今ベルが怒っているのはそこではない。
「鬼殺ファミリアの皆さんを臆病者と言ったことを取り消してください!!」
「ああん？」

そこでベートは何のためにベルが出てきたのか理解したのだろう。だがそれに対する返答は鼻で笑うことであり、取り消すつもりないようだ。

「事実だろう！　冒険者の癖にダンジョンを攻略する気もない、ダンジョンに入れば安全圏で小遣い稼ぎでモンスターを狩るばかり。普段はオラリオの外でフラフラしてやがって、冒険者の癖に碌にモンスターと戦う気がねぇ奴らのことを臆病者と言って何がわりぃんだよ!!」

「それは！　皆さんはモンスターじゃなくて鬼と戦ってるからで！」

「鬼なぁ！　日の下にすら出てこられない再生力が高いだけのモンスターもどきだろ？　あんなのてめぇらの武器さえあれば殺せるんだよ！　実際俺たちだって何回か殺したことがある！　結局あいつらはモンスターと戦う気がねぇから鬼狩りなんて言って、ダンジョンから離れてるんだろ!?」

「なっ……！」

ベルは絶句する。目の前の青年は鬼と戦ったことがあるという、なのになぜ鬼の恐ろしさを理解していないのだろう。確かにロキファミリア冒険者からすれば普通の鬼であれば日輪刀さえあれば倒せるのかもしれない。けれど、冒険者でもない人たちからすればどうだ。ダンジョンの外のモンスターよりも強く、自分たちを食らいに来る存在に、あの日のベルのようになすすべなく殺されてしまうかもしれないのだ。

「あの人たちは、あなたみたいに自分勝手に戦ってるわけじゃない!!　誰かを守るために、これ以上鬼に誰かを殺されないために戦ってるんだ!!」

「それが甘えって言ってんだよ！」

「ベートそれ以上はよせ！　鬼殺ファミリアはロキファミリア同等以上の戦力を保持している。もし君の言う臆病者ならばそれほど強くなれるわけないことはわかるだろう！」

ベルの胸ぐらを掴み上げるベートに対し、フィンは咄嗟に仲裁に入

る。
「黙れフィンッ！」
ベートは苛立たしくフィンを睨むと、そのまま掴み上げていたベルを入口から投げ飛ばす。
「うわっ！」
「ちょ、ベート何してんの!?」
「これまずいんじゃないんですか……」
「フィンとめろ！」
「……」
投げ飛ばしたベルを追うようにベートも店の外に出る。通りにいた通行人らは足を止め、店から投げ飛ばされてきたベルをなんだなんだと様子を窺っていたが、その後現れたベートの姿に目を逸らすように歩き出した。
「立てよトマト野郎」
転がるベルを見下ろすベートに周囲の息を呑む音が聞こえる。中にはそのまま寝ていろ、気絶したふりをしとけとまで言うものもいる。
けれどベルはゆっくりと地面に手をつきながら、立ち上がる。投げ飛ばされただけで、足が笑っている。それでも決してベートから視線を逸らさない。
「てめぇらが臆病者じゃねぇってんならここで証明してみろよ」
そう言ってベートはベルが腰に差す日輪刀に視線を向ける。
「抜けよ。臆病者って言われたくねぇなら俺に一撃入れてみろ。避けねぇでやるから……もっとも」
確かに刃物とはいえレベル1のベルの攻撃ではまともに入れられても大した傷にもならないだろう。
ベートは振り上げた足を地面に叩きつける。
「その後は知らねぇけどな」
踏み抜かれひび割れた地面が、もし一撃入れるならそのあとお前もこうしてやると物語っていた。
通行人を含め、酒場にいた冒険者たちの大半はベルがその場でベー

トに謝り、場を収めることを望んでいるだろう。いつもなら止めに入るであろうリヴェリアはフィンに制止され怪訝な表情をむき出しにしていた。

そんな観衆に見られる中、ベルは自身の持つ日輪刀に視線を落とす。それはこれまでベルと苦楽を共にしてきた借り物の愛刀であり、今回の入団試験で初めて鬼を切った日輪刀であった。もっとも鞘の中ではミノタウロスによってその刀身は半分になってしまっている。それでも刃はついておりベートの言うように一撃入れることは可能だろう。

戦わなければ生き残れない。例え相手が自分よりもはるかに強くても、あのミノタウロスよりも恐ろしい存在であったとしても。それが家族や恩人を馬鹿にされたことを受け入れる理由にはならない。

ベルは歯を食いしばり腰に携えた日輪刀を握りしめ。

そして――

「ベル」

ベート越しに心配そうに、何かを知ろうとベルを見つめる金色の双眼を見た。

「……」

ベルの強張っていた力が抜けていく。そして日輪刀から手が離された。

その様子に周りは安堵の息を吐き、ベートは面白くなさそうに舌打ちを上げると踵を返す。

だが、少女の耳には届いていた。

ヒュウウウウ

その独特な呼吸の音色が。

「水の呼吸　漆ノ型」

「あぁ？」
ベルのか細く吐き出された言葉にベートは怪訝な表情で振り返る。
そして次の瞬間に自身の頬に伝わった衝撃に目を見開く。
一歩下がることも、仰け反ることも、ましてや吹き飛ぼされることなんてありはしない。
けれど確かにその拳は。
ベルから突き出された拳はベート・ローガの頬を穿っていた。
「雫波紋突き・拳……ッ！」
一拍の間を置き、観衆の間にもたらされるのは動揺と叫喚。
もちろんその悲鳴はベートへ向けられたものではなく、これから行われるであろう惨劇を恐れるものなのだが。
「日輪刀は誰かを守るため、敵を倒すための武器です。だからあなたに向けることはできない……！　だからこそ！　僕は僕（弱者）の拳であなたを殴る!!　あなたがどれだけ強いかなんか関係ない！　あなたがなんであの人たちのことを嫌悪するのかは知らない！　だけど、誰かを守るための覚悟がないあなたにあの人たちを馬鹿にする資格はない！　強くなることだけが全てなら一生穴倉に潜ってろ犬野郎!!」
拳を戻し、一歩下がったところから叫ぶ口から飛び出すのは普段のベルからは考えられないほどの強気な言葉。
殴られた直後は口端を大きく吊り上げベルを見下ろしていたベートも、途中から憎々し気に睨みつけていた。
「てめぇ、吐いた唾は？みこむんじゃねぇぞ」
フィンを含め、ロキファミリアの首脳陣がベートの漏らした一瞬の殺意を感じ取り、飛び出すが間に合わない。
ロキファミリア最速と名高い凶狼の蹴りがベルの頭に叩きつけられるのをその場にいる誰もが幻視した。
そう、幻視だ。
実際に目にしたのは。

「よもやよもやだ!!」

二人の間に舞い狂う炎。

「新人の歓迎会を行うと聞いて来てみれば、騒ぎが起こり、渦中の一人は我がファミリアの団員!」

否、それは炎ではなかった。ベートの蹴りを片手で受け止めベルを守ったのは。

「うむ! 事情はこの、〝炎柱〟煉獄杏寿郎が聞こう!」

炎が如き一人の男であった。

九幕〝炎柱〟

「〝炎柱〟……あれが鬼殺ファミリアの〝柱〟の一人」
「レベル5の第一級冒険者か……」
「いつオラリオに帰ってきたんだ？」
「〝炎柱ァ〟!!」
野次馬たちに動揺が伝播し、足を止められた狼人はその場から一歩後退り歯をむき出しににらみつけていた。
緊張の糸が切れたことにより地面に腰を落とすベルの目の前に立っていたのは大きな背中。
ベルと同じく純白の羽織を纏っていながらそこに彩られているのは燃え盛る情景。
腰に携えられた日輪刀には炎の鍔が備えられている。
何より、煉獄を思わせる焔色の髪と眼力のある瞳がその男を表していた。
「この人が、〝炎柱〟……」
一体どこから現れたのか、ロキファミリアでさえベートを止めるには間に合わなかったにも関わらずこの男はベルを守って見せた。それは純粋な速さか、それとも判断力によるものか。
こちらへと振り返る杏寿郎の視線がベルを見据える。強気眼差しにベルの背筋が伸びる。
「クラネル少年！　でよかったか？」
「は、はい！」
差し出された手を握り返すと、大きく固い熱き感覚がベルの手に伝わってくる。ベルを立ち上がらせた杏寿郎は辺りを見渡すと大きく口を開いた。
「〝勇者（ブレイバー）〟！　此度の事情、お前から聞かせてくれ！」
「あぁ、もちろんさ。それと、すまない助かったよ杏寿郎」
群衆の中から現れるフィンは苦笑いを浮かべつつ杏寿郎のもとまで歩み出る。何やら文句を言おうとしているベートはフィンから目

くばせを受けたアマゾネス姉妹が抑え込んでいる。
「うむ！　お前であれば客観的事実を話してくれるだろう！」
「一応当事者のファミリアの団長なんだけれどね僕は。まぁ期待に沿えるように、簡潔に話させてもらうよ」
そこからフィンによる豊穣の女主人で起こったことのあらまし、話題の原因である6階層までのミノタウロスの逃亡事件などについて話された。杏寿郎は説明を聞きながら頷き、フィンの話を聞き終えるまで口を挟むことなく静聴した。
「なるほど！　クラネル少年、今の話で相違ないか？」
「……はい」
冷静になって聞いてみれば自分の情けなさとともに、ベルの恋慕をロキファミリアどころか酒場中に暴露されていたことを理解したベルは説明の途中から顔を真っ赤にしており、杏寿郎の確認にも顔を手で隠し小さな声で答えるのみであった。その答えに杏寿郎は満足そうに頷くと、フィンに顔を向ける。
「先に、我がファミリアの団員がロキファミリアの宴に水を差したことを謝罪する！」
そう言って頭を下げる杏寿郎の姿にフィンは目を見開き、ベルは慌てたように自分も頭を下げる。
「だが！」
顔を上げた杏寿郎の大きな瞳が真っすぐとフィンを、ロキファミリアを見据える。
「自らの失態と責任を棚上げにし、巻き込んだクラネル少年を酒の肴とし笑いものにする！　あまつさえ本人がその場にいるとわかってなお、諫めきれなかったのはどうかと思うぞ!!」
「まったくその通りだ。酒の席で浮かれていた、は言い訳にはならないね。これは団長である僕の監督不行き届きだ。クラネル君には後日、正式にミノタウロスの件も含めて謝罪させてもらうよ」
「というわけだ。クラネル少年、フィンからの謝罪を受け入れるか？」
「え、はい！　も、もちろんです!!　こちらこそ、本当に、なんとい

うか、ごめんなさい……」
「やめてくれクラネル君、君から謝られてしまってはこっちの立つ瀬がないよ」
「あ、いや、すみません」
「……うん、いいよ」
「よし！　これでロキファミリアと団長であるフィンからの謝罪は受け取ったな!!」
あのロキファミリアの団長に頭を下げられてしまったベルは怒涛の展開にようやく一件落着かと大きな息を吐きかけたときだった。
「ならば次は君の番だな!!」
杏寿郎はそういうとベルの腕を掴んで一人の人物の前まで引き連れる。
そして杏寿郎はアマゾネス姉妹に地面に取り押さえられているベートを見下ろしながら意気揚々と発する。
「あとは君からの謝罪だけだ！　〝凶狼（ヴァナルガンド）〟!!」
「え、ちょ、煉獄さん!?」
「ぁあん!?」
凍り付く周囲とは裏腹にこの男だけは燃え盛るように自身の意思を突き通していた。
「もとはと言えば、君がクラネル少年を嘲笑し酒の肴にしたのが原因だ！　さらにクラネル少年が君に噛みついたとはいえ、レベル5が神の恩恵（ファルナ）を与えられたばかりのレベル1に対してあのような挑発を促すのはあまりにも大人気がない!!　一歩間違えればクラネル少年は死んでいただろう！　ファミリアを代表してフィンから謝罪を受け取った！　だがそれはそれ！　〝凶狼（ヴァナルガンド）〟、ここからは君個人の謝意を見せてもらいたい!!」
「ふざけんな！　なんで俺がそこの雑魚に謝んねぇといけねんだよ!!」
「れ、煉獄さん！　僕はもういいですから！　それに僕からもこの人に失礼なことを言ってしまいましたし……」
「そうなのか！　なら〝凶狼（ヴァナルガンド）〟から謝罪を受け取ったのちに、ク

ラネル少年も謝罪すると良い。それで一件落着だな！」
「どこがだ!!」
「きゃっ」
「ちょ、ベート！」
ティオナたちの拘束を振り払ったベートは杏寿郎を威嚇するように歯をむき出しにする。迸る殺気は先ほどベルへと向けられたものとは比べ物にならない、所謂本気（マジ）であった。
「雑魚を雑魚と嗤って何がわりぃ！　身の程を弁えない雑魚に現実を教えてやっただけだろうが！　それを勝手に噛みついてきたのはそこの兎野郎だ！」
「なるほど、俺は君の考えをわかっているつもりだ。だがその上で言おう〝凶狼（ヴァナルガンド）〟、俺は君が嫌いだ。なぜそう、弱者を虐げる行動でしか示せないのだ」
「奇遇だな！　俺もてめぇを殺してぇほど嫌いだよ!!　てめぇらみたいに雑魚を甘やかす奴らがいるから雑魚が付け上がんだろ！　守ってもらえる、そう考えてるやつらが勝手に死んでくんだろうが!!」
「確かにそうかもしれない。だがそれが、目の前で困っている者を見捨てる理由には、弱者を嘲笑する理由にはならない！　俺は強きものとして、力なき者を守る責務を全うする！」
「それを偽善だって言ってんだよ！　てめぇらがその調子じゃそこの兎野「それと！」」
ベルへと視線を移すベートの言葉に被せる様に杏寿郎は告げる。
「クラネル少年は決して弱者でも、ましてや君の言う雑魚でもない。取り消してもらおう」
「あん!?　どこからどう見てもレベル1の雑魚だろうが！」
「強さというものは決して肉体に対してのみ使う言葉ではない。クラネル少年は心優しい。自分への嘲笑ではなく、我らファミリアへの侮辱から君に立ち向かった。圧倒的力の差を見せつけられたとしてもその心が折れることはなかった。もう一度言う。クラネル少年は弱くない、侮辱するな」

「煉獄さん……」
先ほどまでの猛々しく燃え上がる雰囲気は一変。
落ち着き払った炎へと、否。
瞳の奥でのみ激上に燃え盛る炎に見つめられる狼は忌々し気に煉獄と相対する。
そして杏寿郎は一息つくと笑みを浮かべた。
「うむ！　どうやら〝凶狼（ヴァナルガンド）〟は〝剣姫〟にフラれたことがよほど堪えていたみたいだな!!　女子にフラれて気落ちするのはわかるが、だからと言ってそれを他者に当たっては男が廃るというものだ!!」
瞬間、大通りに響き渡るは衝撃音。
ベートから放たれた拳を杏寿郎が真正面から受け止めたことで起こったインパクトだった。
いつもの大きい声に加えて、一層大きく通りに響く声で広める杏寿郎によるベートの失恋（挑発行為）にベートは我を失ったかのように二撃、三撃と攻撃を続けていく。その全てを受け止め、あるいは受け流しながら杏寿郎は、止めに入ろうとするフィンへと制止の視線を投げる。そう、先ほどの台詞は杏寿郎にしては珍しい挑発行為なのだ。このまま問答を続けようがベートがベルに謝罪しないことなど火を見るよりも明らかだっただろう。
何より杏寿郎は怒っていた。
僅かばかりの時ではあったものの杏寿郎から見て、ベルの優しさと強さ（弱さ）は痛いほどにわかった。自身のためではなく、杏寿郎らファミリアのために怒れるベルのために、今度は自分が怒ろうと決めたのだ。端的に言えば、ベートには灸を据えることにした。
この大通りであのような失恋暴露を行えば、ベートが釣れるだけでなく、噂好きの神たちによって瞬く間にベートの失恋事情はオラリオ中に広められることだろう。既に視界の端では喜々として吹聴しに行く神の姿が見受けられる。だが、言ってしまえばこれはベートがあの豊穣の女主人にてベルに対して行ったこととさして変わりはない。
「ぶっ殺してやる〝炎柱〟！」

血走った眼で苛烈な攻撃を行うベートの攻撃を杏寿郎は冷静に対処していく。殴られれば防ぎ、蹴られれば躱し、掴まれそうになれば逆につかみ返して投げ飛ばす。そんな攻防が続けられていた。もっとも杏寿郎から攻撃を行うことは一切ないのだが。

そんな光景を目で追うことさえできないベルはただただ慌てふためくことしかできなかった。

一方でその違和感に初めに気が付いたのは誰だったか。ロキファミリアの主力陣はその、ベートを軽くあしらうかのような杏寿郎の強さに強烈な違和感を感じていた。ベートはロキファミリア最速を冠するだけあって、敏捷を補正するスキルを二つ持っている。何よりここはダンジョンではなく月夜の下だ。

【月下咆哮（ウールヴヘジン）】、狼人なら誰もが発現する獣化スキル。月の光を浴びることで獣性と力が発揮され、全アビリティ能力に超高補正がかかり、状態異常も無効化する強力なスキルだ。杏寿郎へと攻撃を仕掛けてからベートの姿に変化があり、明らかに発動していた。

いくら呼吸法があるとはいえ、同じレベル５の冒険者がああも獣化したベートを転がすことができるだろうか。あれではまるで……。

「てめぇ！　舐めてんのか!!」

「一体なんのことだ？」

「とぼけんじゃねぇ！　なんで攻撃してきやがらねぇ！」

攻撃の手が一旦止み、ベートは吠える。

杏寿郎の方と言えば、何度か手を握り開きを繰り返し、ベートとの攻防も含め何かを調整するかのような所作を見せていた。

「いやなに！　お館様と主神殿に昇華やら数値だのを見せられてもこればかりはいつまで経っても慣れなくてな！　実際に体を動かし、実感せねば。神の恩恵（ファルナ）とは本当に不思議なものだな!!」

「〝炎柱〟、てめぇまさか!?」

「よもや！　ここに来てようやく器の昇華に足りる鬼とまみえるとは!!　〝柱〟の条件がレベル５とはいえようやく先を行く者たちに追いつくことができた！　他のレベル５の〝柱〟もすぐにこちら側へと来るだろう！」

「器の昇華（ランクアップ）……そうか杏寿郎、君も」
「うむ！　ようやく俺もレベル6とやらの仲間入りだ！」
「レベル6……ッ」
杏寿郎のその言葉に当たりのざわつきは最高潮に達する。
――また鬼殺ファミリアからレベル6の冒険者が生まれた。
――これで鬼殺ファミリアが保有するレベル6は五人。ロキファミリアのほぼ倍だ！
――いや、レベル6の数で勝っていても冒険者の数的にはまだロキファミリアの方が。
――いやいや、その代わり鬼殺ファミリアには〝猛者〟に並ぶレベル7が。
――いやいやいや……。
オラリオ三大巨頭の二つであるロキファミリアと鬼殺ファミリアのどちらが上かとフレイヤファミリアをどかして議論しあう民衆。それほどまで杏寿郎のランクアップは大きな波紋となった。少数精鋭の鬼殺ファミリアとレベル7こそいないものの優秀な冒険者を多く保有するロキファミリア、どちらが上かという議論はある意味この迷宮都市における娯楽の一つであるため仕方ない。
とはいえ、これにはロキファミリアも動揺を露わにする。また鬼殺ファミリアに先を越されたと。
ロキファミリアでレベル6に至っているのはフィン、リヴェリア、ガレスの三人だけであり、この三人が最高戦力であった。だからこそ未だレベル5である、特に壁にぶつかるアイズと杏寿郎と相対するベートは焦りを大きくした。
レベル5同士であれば、呼吸を使う杏寿郎と【月下咆哮（ウールヴヘジン）】を発動させたベート、互角の戦いを行っていたかもしれない。だが、ここに来て二人の間に大きな壁があることが判明した。甘いと吐き捨てた強者に先を行かれた。
「器の昇華もようやく体に馴染んだ。続けるのであれば、今度こそ真正面から君を叩こう。どうする〝凶狼（ヴァナルガンド）〟？」
「決まってんだろッ!!」

退くわけないと吠えるベートは一度距離を取り加速とともに攻撃態勢をとる。
「その意気やよし!!」
どこからともなく投げ渡された木刀を手にした杏寿郎も迎え撃つための構えを取る。
「炎の呼吸　壱ノ型」
「ダッシャアアアアアアアッ!!」
縦横無尽に加速したロキファミリア最速のもとから放たれる全力の蹴り。
対するは反対に地面に足を踏みしめる力強い構えから放たれる杏寿郎がもっとも愛用する型。

「不知火」

勝負は一瞬だった。
遠間からの力強い踏み込みにより、炎を発するような勢いで間合いを詰めた杏寿郎の袈裟斬りは、杏寿郎へ足を振り下ろそうとしていたベートの蹴りをすり抜け、その胴へと吸い込まれていった。燃える勢いに呑まれたベートは木刀だったがゆえに切り裂かれることはなかったものの、大きく吹き飛ばされ地面を転がっていった。誰が見ても勝敗はベートの完全敗北で決していた。
ただ一人、目を見開きながら笑う杏寿郎以外は。

「よもやッ！　完全に躱したと思っていたのだが俺もまだまだ未熟！」

静まり返った大通りには、頬に赤い一筋を刻んだ杏寿郎の賞賛の笑い声のみが響き渡った。